

関西の中の

防長

幕末維新史を歩く

一坂 太郎

●初代兵庫県知事時代の伊藤博文



吉田松陰 日本の将来を憂う天皇を
知り、感激して京都で詩を作る



「近世遺賢高名像伝」より

高杉晋作 幕末長州藩の京都周旋に
反対した。松陰門下



久坂玄瑞 「禁門の変」に敗れ京都で
自決。首級は行方不明に。松陰門下



木戸孝允（桂小五郎） 明治十年、京
都で没し東山霊山に葬られる



大村益次郎 大阪を軍都にすべく奔
走中、暗殺される



山県有朋 絶大な権力を握り、京都
に別荘無鄰菴を造る。松陰門下



井上 勝 日本人だけの手で初めて
鉄道トンネルを逢坂山に掘削した



武藤正明 初代大阪駅長。妻は高杉
晋作の妹 武子



光村弥兵衛 開港間もない神戸港を
牛耳った政商



鳥尾小弥太 参勤交代の途次亡く
なった父を慕い、加古川に葬られた



山田顕義 初代司法大臣。生野銀山
視察中に急逝。松陰門下



片山東熊 奇兵隊士から宮廷建築家
へ。奈良・京都国立博物館を設計



一坂 太郎

関西の中の防長



春風文庫

目次

13	藤田伝三郎と美術コレクション	32	31	マッチ王・滝川弁三	68
12	初代大阪駅長	30	30	中部幾次郎の故郷	66
11	桜の通り抜け	28	29	鳥尾小弥太とその父	64
10	幻の大阪兵学寮	26	28	残念さん参り	62
9	大村益次郎の死	24	27	光村弥兵衛と神戸(下)	60
8	適塾と大村益次郎	22	26	光村弥兵衛と神戸(上)	58
7	適塾と防長人	20	25	長州藩の兵庫警備	56
6	大阪に眠る長州兵士	18	24	山田顕義と生野銀山	54
5	大坂蔵屋敷(下)	16	23	生野の「南八郎さん」	52
4	大坂蔵屋敷(上)	14	22	平磯灯標とセメント	50
3	花外楼物語(下)	12	21	親王塚と毛利家	48
2	花外楼物語(中)	10	20	大倉山と伊藤博文銅像	46
1	花外楼物語(上)	8	19	倒された伊藤博文銅像	44
	はしがき	6	18	楠木正成墓所	42
			17	伊藤町と初代兵庫県知事	40
			16	明石藩に潜入したスパイ	38
			15	南御堂前の切腹	36
			14	月性と長光寺	34

49	木戸孝允終焉の地	104
48	東福寺の防長忠魂碑	102
47	京都商人・福田理兵衛	100
46	今井似幽と古聖堂	98
45	長州人首塚	96
44	西本願寺と長州藩	94
43	御所始御門	92
42	香川助三暗殺事件	90
41	池田屋事変と吉田稔麿	88
40	長州藩京都屋敷	86
39	山県有朋と無鄰菴	84
38	伏見の乃木神社	82
37	松陰「山河襟帯の詩」	80
36	敵の「志」を認めた男	78
35	新選組に入った長州人	76
34	宮廷建築家・片山東熊	74
33	井上勝と逢坂山トンネル	72
32	伊藤博文と禅昌寺	70

51	吉田松陰と尊攘堂	106
	軍都大阪の名残り	108

関係地図	110
------	-----

【付録史料】洛東東福寺山上戦死之墓図	112
--------------------	-----

「関西の中の防長」を片手に 山口県の歴史を歩く	114
----------------------------	-----

表紙 紙 〓 初代兵庫県知事時代の伊藤博文

弁天浜から見た神戸港

扉 〓 ありし日の神戸大倉山公園の伊藤博文銅像

裏表紙 〓 奈良国立博物館

はしがき

私の故郷は関西だ。兵庫県芦屋市で産声を上げ、神戸市で大学進学のため上京するまでを過ごした。防長（周防・長門）こと山口県に移り住んだのは二十三の時、以来十五年という時が流れている。こちらが第二の故郷というべきなのだろう。

誕生間も無い私が住んでいた芦屋市は、毛利家先祖である阿保親王が眠る地である。関西実業界で活躍した吉田松陰末裔の杉道助さんと、同じく実業界にあった祖父とは親交があった。小学三年の社会科の授業で、初代兵庫県知事が千円札に描かれた伊藤博文だと教えられた。小学生時代の遊び場だった明石公園の入り口には、下関で大洋漁業を起こした中部某の銅像が建っていた。

いろいろと思い出してみると、以前から私の身近な所に「防長」は存在していたことになる。新幹線のぞみ号を使えば、新神戸から新山口までは僅か一時間五十分だ。だから私にとつての故郷は、時間的にもそれほど遠いものではない。公私にわたる用事で年に何回も往復している。そしていつの頃からか、幕末維新を中心とする関西における防長人の足跡を調べ、暇を見つけては訪ね歩くようになった。

こうして集めた資料をもとに、「朝日新聞」（山口県版）紙上に「関西の防長」と題し、平成十五年九月から本年一月まで五十一回連載した（毎週日曜日、ただし休載日もある）。故郷を後にした防長人たちが紡ぎ出したドラマの数々を書くことは、

私にとり第一と第二の故郷の接点を探る作業であり、なかなか楽しいものだった。

新聞連載で終わりにするつもりだったが、単行本化を望む声を結構頂いた。私の周囲を見渡しても、確かに進学や仕事で関西に住んだ経験があるという人は多い。あまり根拠が無い話だが、防長人は東京に対して憧れを、関西に対して親しみを持っているような気がする。そこで、類書もないようなので、連載時の原稿に少し手を加え、出版しておくことにした。これから山口県から出、関西で活躍しようと志す若い方たちの指針になってくれればという密かな期待もある。

まだまだ書き残したことも多いのだが、それはまたの機会としたい。なお、地名の大半は執筆時のもので、平成の大合併が進む現在、変更もあると思うが、この点はお容赦願いたい。大阪は明治までは通例に従い大坂とした。連載時の題は「関西の防長」だったが、私の旧著に『東京の中の防長』（「山口新聞」連載・平成十年山口県広報課刊）というがあるので、これに倣わせてもらった。

文末になりましたが、取材にご協力下さった皆様、連載でお世話になった朝日新聞社の皆様、出版にご協力下さった皆様、そして支持して下さった読者の皆様に深甚なる感謝の意を捧げます。

平成十七年一月 阪神淡路大震災十年の日

一坂太郎

1 花外楼物語 (上)

証券取引所などが建ち並ぶ大阪北浜の、土佐堀通りに面した新しいビルの壁に「花外楼」の筆文字がある。老舗の割烹料亭で永年使われるこのロゴは、実は長州出身で、維新の元勳である木戸孝允（桂小五郎）の筆跡だ。

それはここが明治八年（一八七五）二月、日本の進路にとり重要な「大阪会議」の舞台になったことによる。

花外楼は幕末の創業で最初、加賀伊といった。初代伊助の先祖が加賀国の庄屋だったからだ。やがて長州藩の若者が義侠心あついで伊助を信頼し、加賀伊は密談場になった。このため新選組が斬りこんだという逸話も残る。

店の背後は川で、近くには三十石舟の発着点八軒家もあったから、密談にはふさわしかった。時は流れて幕府は倒れ、明治という新時代が訪れた。

薩摩出身の政府参議・大久保利通は、明治六年に征韓論を斥け、翌七年の台湾出兵を強行。その結果、多くの政敵が下野し、孤立無援となってしまう。

見かねた長州出身の伊藤博文と井上馨は、下野していた木戸孝允と板垣退助（土佐）を政府に復帰させ、藩閥のバランスをとりながら、体制の立て直しをはかろうとする。説得を受けた三者は会談を承知したが、問題は場所だった。

東京では目立ちすぎる。山口や高知というわけにもいかない。



花外楼
KAGAIRO

「花外楼」のロゴは木戸孝允の筆蹟



木戸書「花外楼」の原本

そこで伊藤は大阪に着目した。

明治八年一月、有馬湯治を名目に大久保が大坂入り。続いて木戸が下関から海路やって来た。二月になると民撰院（国会）設立建白のため奔走中の板垣も、姿を現す。

こうして、いわゆる大阪会議が、以前から長州との付き合いが深い加賀伊で開かれた。

大久保独裁に批判的な木戸は三権分立を唱え、大久保はこれを了承した。

そこで三月には木戸と板垣が政府に参議として復帰、四月には立憲政体樹立に関する詔書が出されるなど、早くも会議の成果があらわれる。

加賀伊は会議の成功を記念し、屋号の字を改めたいと木戸に依頼。

木戸は「花外楼」とした。いま、花外楼は近代的なビルに姿を変えたが、当時の場所で営業を続け、玄関には「大阪会議開催の地」の石碑も建つ。

また、木戸の直筆「花外楼」は額になり保存されている。

【メモ】花外楼は大阪市中央区北浜一―一四、地下鉄堺筋線北浜駅下車すぐ。

玄関脇には「大阪会議開催の地」の石碑が建ち、壁には由来を刻むプレートがはめ込まれている。説明文を書いたのは、吉田松陰子孫で大阪実業界の巨頭杉道助だ。

大阪会議当時の建物は明治四十四年、道路拡張のため西宮に移築したが、戦災で失われた。その後の建物も昭和三十八年に老朽化のため取り壊された。

2 花外楼物語(中)

大阪北浜の割烹花外楼には、いまでも長州出身の元勳たちとの交流を示す逸話や史料が数多く伝えられている。

特に女主人の徳光孝（お孝）は、『大阪維新秘話・花のそと』（昭和四十一年）という回顧録を残している。お孝は明治二十一年（一八八八）生まれで、府立堂島高等女学校卒。同四十四年、桂太郎の薦めにより花外楼を相続した。『大阪維新秘話・花のそと』にはお孝の実体験と、その母お悦から聞いた話が集められ貴重だ。

ある時、派手好きな伊藤博文が二頭立ての馬車で現れ、投宿した。

花外楼の周囲は、巡査が毎晩徹夜で仰々しい警戒に当たる。彼らの苦勞を知るお悦は、伊藤の機嫌がよい時を見はからい、巡査たちに書を与えてはどうかと提案。当時、世間で伊藤の書は高額で取引され、珍重されていたのだ。

伊藤は、

「うん、そうか、よし、よし」

と気軽に約束した。お悦は色紙や書箋紙を買って来ては、伊藤の床に積み重ねた。伊藤は暇をみては書き、それをお悦は巡査たちに配り、喜ばれたという。

また、ある深夜、台所でもの音がするのでお悦が見に行くと、なんと、暗闇に伊藤が立っていた。寝付かれぬから酒を探しているのだという。



伊藤博文「花魁」など長州出身の元勳たちの書

そこでお悦は一本お燭をつけてやり、居間で伊藤の話聞いた。伊藤は平素に似ず、しんみりして家庭のことなど話したという。

それから間もなく、伊藤はハルピンで暗殺された。

上京し葬儀に参列したお悦は、あの夜の伊藤が思い出され、いつそう悲しかったと、よくお孝に話したという。

花外楼には伊藤の「花魁 春畝閑客」の書扁額が現存する。花魁は音が花外に通じる。春畝は伊藤の号だ。

豪快な井上馨が、鴻池（こうのいけ）の別荘でお悦やお孝や花外楼の料理人などに手伝わせ、大阪財界の名士を招待して料理を振る舞ったことがあった。それはラッキョ酢やあま酒などをカクテルした吸い物などで、衆客たちの顔をなからしめたという。

また井上は意外と細かい一面を持っていた。ある夕方、サイダーを所望して半分飲み、あとは残しておけと命じたにもかかわらず、女中は捨ててしまった。ところが井上は夜中になり、飲みさしのサイダーを出せという痼癪（くわしやく）もちの井上のことだ。困った花外楼では、新しいサイダーのツメを抜き、半分目にして持つて行った。井上から

「ツメはしておくものだよ」

と叱られたので、一同、泡を食ったという。

3 花外楼物語 (下)

近年建てられた花外楼のビルの一室には、小さな資料室が設けられている。

先日、私は四代目徳光憲あきさんと現社長（五代目）の徳光孝信さんに案内いただきながら、拝見する機会に恵まれた。

花外楼を鼠舩にした長州出身の維新の元勳たちが大阪に残した書が、掛軸や額になり大切に保存されている。ひとつひとつを眺めていると、彼らの息吹が残っているような気がして、山口県から訪ねた私などにとつては、なんとも不思議な空間である。

欧米を巡視した木戸孝允きど たかよしが、帰国の感激を詠んだとされる詩書が掛軸になっている。

明治八年（一八七五）、日本の進路を決める大阪会議を開くにあたり、伊藤博文が東京から大久保利通を呼び寄せた手紙の草案が巻物になっている。

大阪会議の成功を記念し、木戸が加賀伊を花外楼に改めたことは前述したが、これに対抗したのか伊藤博文が「花魁」、井上馨が「香涯楼」と大書した額もある。他にも井上が画家に描かせた六歌仙に戯歌を添えた書など、遊び心がうかがえ面白い。

明治政府の中で井上馨は、長州出身の同世代である伊藤博文や山県有朋に比べ、出世レースで遅れをとった。

爵位も伊藤や山県が最高位である公爵なのに、井上は一段下の侯爵どまりだ。総理大臣にもなれなかった。財界との癒着が問題化したのが大きな原因とされる。井上は、そんな胸中を、「未不受公候位、蒼々傲

雪霜何疆、万年寿帯見復凋光 世外」という書に託し、花外楼に残している。

また、長州出身の軍人政治家として知られた桂太郎は、こんな歌を色紙に書き残している。

「三千世界の鳥をさとし そして朝寝がしてみたい」

同郷の先輩高杉晋作が作った都々逸のパロディーだ。

伝わるところによると、桂が最初に宰相となった明治三十四年頃の作。新聞記者や政党人に追いかける日々の中で、花外楼で息抜きをしたい心境なのだ。鳥を「殺し」ではなく「さとし」としたところが、人情あつい桂の人柄を示す。

花外楼は長州出身の元勳たちにとり、「癒し」の場だったのだ。生命をかけて国事に奔走した、若い頃からの付き合いだから、栄達を遂げた後も遠慮無い、気さくな関係が続いたのだろう。

【メモ】『大阪維新秘話・花のそと』には、長州藩出身で「鉄道の父」と称された井上勝にまつわる思い出も述べられている。「真面目な方でしたが、また一面非常におもしろい方」という井上は、夜尿の癖があった。女将のお悦は注意を与えなれば冗談で「以後出入禁止」を申し渡す。真に受けた井上はしばらく姿を現わさなかったが、ある日ひよっこりやつて来て「右手を額のあたりで左右に振りながら、『お悦、勘当ゆるせ』と言った。その仕草はとて面白かった。また、花外楼に対する井上の思いにお悦は感動したという。

桂太郎が高杉晋作の都々逸をパロディーにした書



4 大坂蔵屋敷(上)

土佐堀通りとなにわ筋の交差点北東側、高層ビルが林立する谷間に、開運山高野寺(大阪市西区土佐堀一―五)という鉄筋コンクリート造りの寺が窮屈そうに建っている。

寺の仏壇の奥には、表に「長州藩歴代物故藩主霊牌」、裏に「明治四年吉日 施主毛利敬親」と刻んだ一本の位牌が安置されており、ひっそりと商業都市大阪の変遷を見つめて来た(ただしこの位牌は後年に作られたものらしい)。

産業立国を目指した長州藩と、天下の台所と呼ばれた大坂(大阪)との関係は、切っても切れぬものがある。

江戸時代、諸藩は大坂に設けた蔵屋敷に米や物産品を集め、全国に売りさばいた。

幕末の天保年間(一八三〇―四四)になると、中之島や堂島を中心に百二十四もの蔵屋敷が軒を並べていたという。

長州藩が、舟運の便利な土佐堀沿岸(常安橋傍じょうあん)に蔵屋敷を構えたのは、万治三年(一六六〇)十二月のことだ。その後も数回にわたり隣地を買ひ広げ、ついには三千三百六十坪余りの広大な屋敷地となった。大坂蔵屋敷には留守居役が詰め、後に大坂頭人を称された。

藩が開発に熱心で、増産を奨励した特産品は米・塩・紙・蠟ろうの四品目だ。これらは「防長の四白しはく」と呼ばれ、品質も良く、大坂市場で高値で取引され、藩の台所を潤した。

四白のうち大坂で特に歓迎されたのは、蠟である。



高野寺の長州藩歴代藩主位牌

蠟は藩内でロウソクや鬢付の需要を満たした残り全てを、生蠟のまま大坂に送り出した。長州藩の蠟は「二〇」の商票が付けられていたので、大坂商人たちはこれを「二丸蠟」と呼んだ。最盛期の宝暦四年（二七五四）には、蠟だけで二千五百丸余り、代銀八百三十七貫目の輸出額があった。

長州藩が維新の戦争に勝利し、出身者が明治政府で先頭を走ることが出来たのも、大坂を本拠にした経済活動による蓄えに拠るところが大きい。

だが「禁門の変」で敗れた長州藩が「朝敵」となるや、元治元年（一八六四）七月二十三日、大坂蔵屋敷は幕府方に没収された。再び毛利家の手に帰するのは、明治元年（一八六八）二月のことだ。

明治二年になり毛利家は、二百年にわたり重要な役割を果たした大坂蔵屋敷の地を、真言宗総本山の高野山に寄進する。

高野山では三蔵院という塔頭（たつちゆう）を、蔵屋敷跡に移した。以後「長州大師」の名で信者から崇められ、祭礼の日などには大変な賑わいをみせたという。これが長州藩主の位牌を祀る、現在の高野寺の前身なのだ。

【メモ】長州藩大坂蔵屋敷跡は地下鉄四ツ橋線肥後橋駅下車徒歩十分。時山弥八編『もりのしげり』によると、長州藩は土佐堀の他にも大坂福島と大坂富島に蔵屋敷を持っていた。いずれも元治元年七月、幕府方に没収されている。

5 大坂蔵屋敷(下)

長州藩大坂蔵屋敷の責任者は、大坂頭人と呼ばれた。

大坂頭人は藩士の中でも二百五十石以下の八組士(馬廻り役)から選ばれる。大坂の豪商たちを相手に、藩の資金運転などを協議する仕事だから、実務能力に長けた者でなければとまらない。例えば高杉晋作の祖父又兵衛は、国もとの地方代官を歴任した実績が評価され、この役に就いている。大坂頭人の中には大坂銀子方があり、米方・用紙方を兼務していた。

大坂市民に親しまれた蔵屋敷の行事に、「長州の紙開き」がある。

長州藩が熱心に生産を奨励した特産品のひとつである和紙は、毎年正月九日から蔵開きという発売式を行った。ゴボウや数の子、ブリといった質素な料理だったが、食べ放題、飲み放題だったので、その日は市中のいたる所で酔倒者があった。人々はこれを見、紙開き当日であるのを知ったという。

幕末になると、土佐堀沿岸の長州藩蔵屋敷は、京都に近いせいもあり、政治活動の重要な拠点になる。当時の大坂頭人は北条瀬兵衛だ。

元治元年(一八六四)七月の「禁門の変」の際も、長州軍は藩地から海路、一旦大坂蔵屋敷に入り、さらに淀川を溯って戦場となる京都を目指した。この蔵屋敷で、多くの別れの盃が交わされたことだろう。

「禁門の変」で長州軍が敗れるや、幕府は蔵屋敷を没収。維新後、毛利家が買い戻し、高野山に寄付したことは先述したとおりだ。

蔵屋敷跡の一角、土佐堀通りとなにわ筋の交差点角の歩道の真ん中に「街角の再発見」として、史跡を



長州藩大坂蔵屋敷跡の碑

示す石碑が建てられたのはバブル経済真つただ中の昭和六十三年（一九八八）十二月のこと。

都会の雑踏の中に埋もれていた、幾千万もの防長人たちの思いが、甦ったようであれしかった。一見、現代彫刻のような碑の台座正面には「長州萩藩蔵屋敷跡」とあり、筒型の碑には、次のような説明が刻まれる。

「この辺りは、かつて江戸堀の一角で、江戸時代には中之島とともに諸藩の蔵屋敷が立ち並んでいたところです。蔵屋敷には米をはじめ諸国の物産が集められ、大坂は、このため天下の台所として賑わいました。ここにあった広大な長州萩藩の蔵屋敷には、幕末の動乱に際して、長州へ落ちのびる途中の三条実美ら尊王攘夷派の公卿七人も立ち寄ったことがあります」

【メモ】時山弥八編『もりのしげり』によれば、長州支藩の大坂邸は次のとおりである。長府毛利家は中之島肥後島町の肥後橋北向、徳山毛利家は立売堀西ノ町の西仁橋東詰、岩国吉川家は中之島常安橋北詰にそれぞれ屋敷を持っていた。しかし「禁門の変」敗走後の元治元年（一八六四）七月二十三日、いずれも幕府方に没収されている。

6 大阪に眠る長州兵士

宇部に住む長州藩家老福原家の家臣たちの多くは、元治元年（一八六四）七月十九日、「禁門の変」に参加した後、上方かみかたから帰らなかつた。あきらめた家族たちは「終所不知」と刻んだ墓碑を、宇部維新山の招魂場（現在の宇部護国神社）に建てた。

その死の真相が明らかになるのは、後年になつてからである。

京都での戦いに敗れた福原家臣団を含む六十余人の長州兵の一団は、伏見から船で淀川を下つて逃れる途中、幕府方に捕らえられた。そして千日前せんじつまえ（現在の大阪市中央区）の仮獄舎に投じられた。

投獄された長州兵に対する幕府の扱いは、苛酷を極めた。

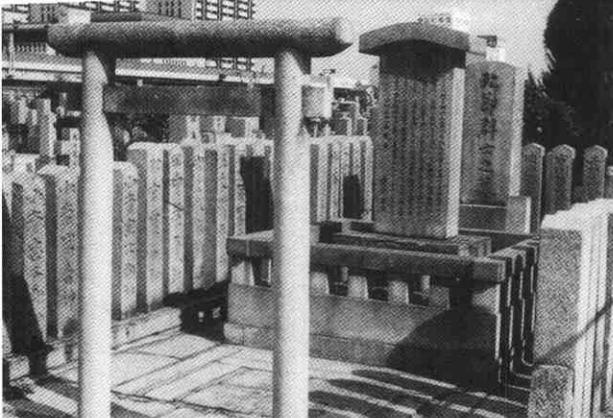
半年間に刑死者六、獄死者三十九が出た。一説によると、毒殺された者もいたという。その遺骸は、犬猫同様に刑場の片隅に無造作に埋められた。

しかし時代が変わり明治となるや、彼らの立場は逆転し、殉難者としてたたえられる。

明治二年（一八六九）夏、長州藩は大阪四天王寺に近い夕陽丘の大江神社一角に、千日前等で亡くなつた兵士たちの霊四十八柱を祭る招魂社を創建し、四十八基の墓碑を建てた。さらに兵士たちの遺骸探しを始める。

やがて情報が入つた。千日前の南鏡園という料亭内に「勤王の志士の首塚」があり、評判となり客で賑わつてゐるといふ。

これが長州兵の墓に違いないと、藩は料亭に交渉するが、容易に引き渡しに応じてもらえない。そこで



阿倍野靈園の長州兵墓所

長州藩では、大阪の侠客・小林佐兵衛に口添えしてもらい、料亭側に承諾させた。料亭の主人は以前、悪漢に襲われたところを、小林に助けられたことがあったのだ。

小林は子分や人夫に首塚を掘り起こさせ、丁重に遺骨を洗い、箱に納めた。そして「殉難志士之遺骨」と染めた旗を押し立て、市中を練り歩き阿倍野墓地に埋葬する。のち、大江神社に建てられていた墓碑が、こちらに移された。

阿倍野墓地（大阪市阿倍野区阿倍野筋四丁目）の南霊園四区にそれは現存する。「死節群士之墓」（明治二年建立）と「顕彰碑」（昭和三十一年、長友会建立）を囲み、角材型の墓碑四十八基がコの字型に並ぶ。

また、最初に設けられた夕陽丘の招魂社も大江護国神社（大阪市天王寺区夕陽丘町二四）として現存する。こちらには小さな祠と、四十八名の名を刻んだ「旧山口藩殉難諸士招魂碑」（揮毫毛利元昭、明治二十三年建立）がそびえ建つ。

いづれも、幕末の動乱に巻き込まれたため、再び故郷の土を踏めなかつた兵士たちの無念を伝える史跡である。

【メモ】阿倍野墓地は地下鉄阿倍野駅下車すぐ。大江神社は地下鉄四天王寺駅下車徒歩十分。

7 適塾と防長人

大坂の適塾（適々齋塾）といえば、日田の咸宜園かんぎんえんや長州の松下村塾とならば、幕末を代表する私塾として名をとどめる。

適塾を主宰したのは、蘭学者で医者おがたこうあんの緒方洪庵（現在の岡山県出身）だ。ほんらい適塾は、オランダ医学を講じる塾だった。しかし塾風は自由で、洋学のあらゆる分野を学ばせたから、橋本左内・福沢諭吉・大鳥圭介けいすけ・佐野常民つねたみ・長与専斎ながよせんさい・大村益次郎など幕末から明治にかけて、第一線で活躍する多彩な人材を輩出することになる。

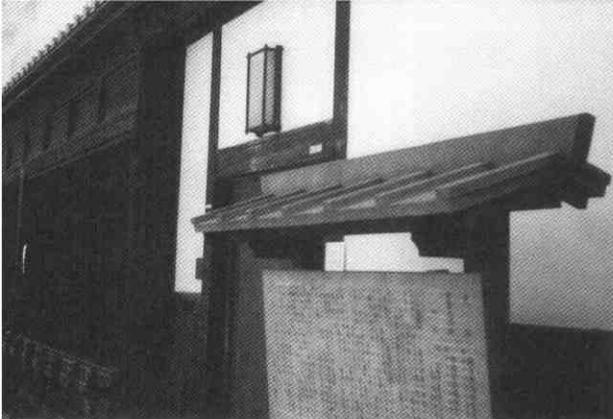
天保九年（一八三八）の開塾以来、二十五年間に学んだ約六百五十名の名簿が残る。出身地別に見ると、防長二州からの入門者が最も多く五十六人を数える。長州藩の進取の気性をうかがわせる。

『山陽史話』二巻（昭和四十六年）には、現在の厚狭郡山陽町（平成十七年三月よりは山陽小野田市）殿町出身で、適塾に学んだ桑原玄卓・英甫兄弟の、こんな悲話あさが紹介されている。

桑原家は厚狭毛利家（藩主一門）に代々医者として仕えた。

幕末の当主玄晦は、四十四歳で病没する数日前、まだ見ぬ洪庵に、長男玄卓の行く末を託す手紙を書く。そして玄卓は十六歳で上坂して適塾に学ぶが、翌年病死してしまう。

弟の英甫は、兄の分まで頑張る覚悟で、十三歳で適塾に入り、懸命に学んだ。その甲斐あり、十九歳の万延元年（一八六〇）には師洪庵と共に備前藩主の治療のために出張、銀子七枚を賜る光栄に浴している。英甫は玄蟠と名を改め、維新後は大阪洋学校の教官を務め、前途揚々たるものがあつた。



多くの防長人が学んだ適塾

ところが明治二年から三年にかけて起こった奇兵隊や諸隊の反乱（脱隊騒動）を鎮圧するため、防長出身の生徒約八十名を率いて帰郷。戦いで傷ついた玄蟠は、三田尻の病院に収容されるも、明治三年三月七日、二十九歳の若さで息を引き取る。厚狭で行われた玄蟠の葬儀では、二十四歳の若い未亡人と五歳の幼な子の姿が、特に参列者の涙をさそったという。

桑原兄弟を始め多くの青年たちが、あふれんばかりの大志を胸に学んだ適塾の建物は、重要文化財となり現在もビル街の谷間に残っている（大阪市東区北浜三―三〇）。塾生たちが一冊しかないツーフ辞書（蘭和辞書）を奪い合って使った部屋とか、寝起きしていた大部屋に佇むと、命懸けで学ぼうとした者たちの熱気がまだ漂っているような気がした。

【メモ】適塾は京阪電車または地下鉄御堂筋線淀屋橋駅下車徒歩五分。

なお、適塾名簿に見られる防長出身者は以下のとおり。 浜桂鼎介・東条英庵・飯田苗三郎・新本玄芝・藤村玄龍・三輪謙治・村田良菴（大村益次郎）・山県玄淵・石原淳道・森国得一・坂田宗甫・松浦道伯・浅田文厚・荻山瀛門・伊藤精一・青木省吾・岡宅次・高村閑齋・大地要人・中司俊平・坂田秀輔・仁保壽安・山県周平・小川新平・萩岡良衛・石井玄良・水野良哉・三木芳策・桑原西蔵・桑原玄阜・高井泰造・石口玄介・牛尾圭齋・太田玄讓・徳島泰隆・柴六郎・田中堯民・松岡勇記・土司讓四郎・竹田庸伯・岡本昌甫・坂井修造・桑原英甫・中司俊哉・白石安熊・関玉造・鈴木春齋・土屋元鴻・仁専良伯・上田春学・南部恭平・黒瀬瀬民・村田文蔵・神原真齋・長谷川黙然・石井行蔵。

8 適塾と大村益次郎

司馬遼太郎の小説『花神』の主人公として知られる大村益次郎は、前名を村田亮庵、あるいは蔵六と言った。周防国鑄銭司村（現在の山口市の一部）の、村医者の子である。

蘭学を志した大村は二十三歳の弘化三年（一八四六）、大坂に上り、適塾を主宰する緒方洪庵の門を叩く。適塾は能力別のクラス編成がなされていたが、入門後の大村はめきめきと頭角をあらわした。そして長崎に留学後の嘉永二年（一八四九）には、塾頭の椅子に座る。

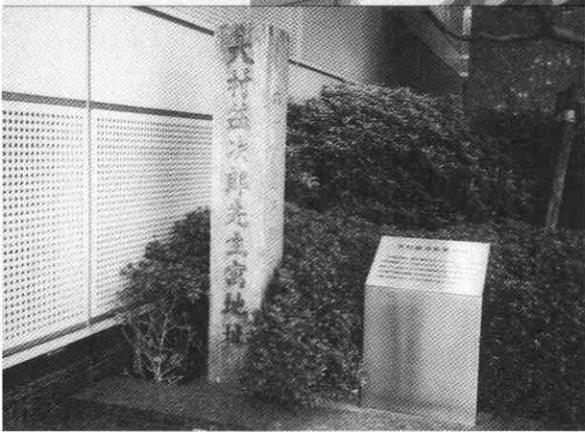
それまで塾に寄宿し生活していた大村は、同年閏四月一日、江戸堀の倉敷屋作衛門宅の座敷に引越した。適塾から土佐堀川に沿って、約二キロの距離だ。すぐ近くには、長州藩や薩摩藩の大坂蔵屋敷があった。さらに大村は、閏四月二十八日に上町銭南筋徳井町に転居し、自分もささやかな塾を営んだ。

土佐堀通りに面していた倉敷屋の跡には、現在シミズビルがそびえ立つ。その入口左脇に、昭和十八年（一九四三）六月、大村卿遺徳顕彰会によって建てられた「大村益次郎先生寓地址」と刻む、高さ一メートル程の石碑がある（大阪市西区江戸堀二一六一三五）。

適塾塾頭になった大村は、翌嘉永三年には大坂の地を離れ、郷里へ帰って父の跡を継ぎ、村医者稼業を始めた。

最先端の西洋医学と兵学に通じた大村だったが、あまりにも無愛想なキャラクターは、村人たちの反感を買う。村人から、

「お暑うございますね」



大村益次郎下宿跡の碑

と声を掛けられても、

「夏は暑くて当たり前です」

と、慥然としていたと伝えられる。

しかし嘉永六年、洋学者として認められた大村は四国の宇和島藩に召され、やがて江戸にも出て、幕府の蕃書調所などで教鞭をとった。あわてた長州藩が大村という英才を取り戻し、正式な藩士としたのは、万延元年（一八六〇）四月のことである。

大村はその後、幕府軍との戦いで作戦指令を務め、明治二年（一八六九）には兵部大輔となり近代軍制の基礎を樹立した。

【メモ】大村寓居跡の碑は地下鉄四ツ橋線肥後橋駅下車、江戸堀を西へ徒歩約十分。

丹澤『大村益次郎』（昭和十九年）によれば、昭和十八年六月三十日、大阪の大村卿遺徳顕彰会では、現存する寓居跡の碑の他に「大村益次郎先生漏月庵址（東区徳井町一―一山崎徳次郎氏宅付近）」の碑も建てた。大村が嘉永二年閏四月二十八日以降に住んだ地である。現在の地下鉄谷町線谷町四丁目駅のすぐ近くだが、その碑は現在確認出来なかった。

9 大村益次郎の死

新政府の兵部大輔に就いたのは、長州藩出身の大村益次郎だった。

明治二年（一八六九）八月、大村は陸海軍制度の大改革に着手すべく、東京から数人の供を従えただけで、関西に乗り込んだ。

当時の大村は、持ち前の合理的な頭脳で、急激な改革を進めた。各藩の武士団を解体し、徴兵制を敷き、出身階級を問わない国民軍を創ろうとしたのだ。

しかし、特権を奪われることになる士族たちの反発も強く、その周囲にはつねに危険が迫っていた。にもかかわらず無防備だったのは、大村が人間の感情に対し無頓着すぎたせいかもしれない。

案の定、大村は九月四日夜、京都三条木屋町の旅宿（長州藩控屋敷）の二階座敷で、八名の刺客に襲われる。三名の供や客は斬殺されたが、負傷した大村は風呂場（あるいは別室）に隠れ一命をとりとめた。犯人たちは、大村を洋化を進める革新の元凶とみなし、その生命を奪おうとしたのだ。

大村はただちに医者の手当を受けた。ところが顔や手の傷は快癒したが、右膝関節の傷は悪化する一方で、足の屈折も困難となり、高熱が続き敗血症の兆候もあらわれた。そこで、大阪病院在勤のオランダ人医師ボードインの治療を受けることになり、臥床のまま舟に乘せられ、高瀬川を経て淀川を下り、鈴木町の大阪病院に入った。

大村は負傷した右足を切断し、危機を逃れようとしたが手遅れだった。十月二十七日の手術後の経過は不良で、敗血症のため十一月五日、帰らぬ人になる。享年四十六。



大村益次郎終焉地の碑

大村を失ったことは、その後の明治日本にとり大損失であった。それでも大村の残した数々の建策が実行に移され、諸藩の軍事力はやがて一本化されて、日本の国軍が誕生する。

大村の遺骸は大坂から瀬戸内海を経、故郷の周防鑄錢司すげんじに帰る。

また、切断した右足は、大坂東寺町の童海寺にある師緒方洪庵墓所こうあんの傍らにひそかに埋葬された。大坂に自らの肉体の一部を残しておきたいと、大村が願っていたからだ。その後、忘れ去られようとしたが、昭和十五年（一九四〇）十一月になりようやく「大村兵部大輔埋腿骨之地」と刻む墓碑が建てられ、通称「大村の足塚」として知られるようになる。

大村が息を引き取った地は、現在、国立大阪病院となっている。

病院の上町筋交差点に面した一角には「兵部大輔大村益次郎卿殉難報国之碑」と刻む、高さ数メートルもの巨碑が昭和十五年（一九四〇）に建てられた。刀を差して洋椅子に腰掛け、洋書を読む、太い眉の大村像のレリーフがはめ込まれているのも人目をひく。当時大村は、国民皆兵を推進した先覚者として評価されていた。寄付者の中には財界人の他、東条英機の名もあり、翌年から始まる太平洋戦争の足音を聞く思いがする。

【メモ】大村遭難地の京都市中京区木屋町通り押小路下ル二筋目には石碑あり。終焉の地は大阪市東区法円坂二―一、地下鉄谷町線谷町四丁目駅より徒歩十五分。足塚のある童海寺は大阪市北区同心一―三一―一、地下鉄堺筋線南森町駅下車より徒歩十分。

10 幻の大阪兵学寮

明治日本の草創期、新設された兵部省の兵部大輔に任ぜられたのは、長州藩出身の大村益次郎だった。明治二年（一八六九）七月のことである。

これにより大村は事実上、海陸軍制の最高責任者になった。

薩摩派の反対があつたものの、大村は建軍の本拠を大阪に定めようとする。

戊辰戦争が終わつたころ、大村はすでに九州で西南戦争が起ると予測していたので、西に軍事の中心を置いたという。他にも運輸面に優れているとか、攻守に適した地形とか、外国の攻撃を受けやすい首都から離れているとか、様々な理由があつた。

人材育成が急務と考えた大村は、大阪に兵学校設立の必要を説く。ところが大村は関西出張中の明治二年十月、不平士族の凶刃に倒れてしまった。

大村の遺志を継いだのは、同じく長州藩出身の兵部大丞山田顕義あきよしである。藩校明倫館や松下村塾で学び、戊辰戦争では新政府軍の参謀として箱館五稜郭攻略を指揮した俊才だ。

山田らの尽力により大阪城の京橋口門内に大阪兵学寮（兵学校）が設立されたのは、明治二年十一月のことである（八月・九月説あり）。

その頃の大阪城は戊辰戦争の戦火で、二、三の櫓だけを残し焼野原だった。

そこに洋式建築が建つのを見た浪速っ子たちは、大阪城を外国人が買ったとか、外国人が住むのなどと噂したという。さらに三年になると山田も大阪城に乗り込み、兵部省の大阪出張所の諸施設が城内に設



兵学寮が置かれた大坂城

けられてゆく。

兵学寮の開校は十二月二十八日で、三十三名の新入生が青年舎生徒としてその門をくぐった。さらに金沢藩の請願を許し、同藩士若干名が入学した。

兵学寮はフランス式教育で統一され、士官養成を目的とし、歩・騎・砲の三兵科が設けられた。また、京都のフランス式練兵所の伝習生百名を吸収し、これを教導隊とした。こうして明治三年五月頃になると、兵学寮はその形を整え始めた。

ところが明治四年十二月、兵学寮は東京に移転することになる。教師の人材不足や、中央集権政策が原因という。大村の遺策だった大阪を陸軍の本拠とする方針は変更されてゆくのだが、兵学寮は陸軍士官学校へと発展した。

大村や山田の「夢の跡」大坂城は、その後も軍事拠点としての歴史を歩む。まず明治四年二月に大阪鎮台が置かれた。鎮台とは全国の陸軍を地域ごとに四つに編成（明治六年からは六つ）したもの。さらに大阪鎮台は明治二十一年五月の陸軍再編により第四師団司令部となり、昭和六年（一九三二）十一月には市民の寄付を集めて天守閣が再建された。

【メモ】兵学寮のあった大坂城は大阪市中央区馬場町、JR環状線大坂城公園下車。

11 桜の通り抜け

関西の春はお水取りで始まり、通り抜けで終わると言われる。

多い年では一週間に百万人近くの花見客を迎えるという造幣局の通り抜けを提唱したのは、一人の防長人だった。

淀川（現在の太田川）右岸で造幣寮（のち造幣局）の建設工事が始まったのは、明治元年（一八六八）十一月のことだ。

維新のさ中、日本の首都が大阪に決まりかけたことがある。

その可能性がまだ残る段階で、造幣局建設は計画された。だから東京遷都後も、当初の予定どおり造幣局は大阪に造られた。現在でも造幣局は大阪が本局で、東京と広島が支局だ。こうした国の機関は他に例を見ない。

造幣局が開局した明治四年四月、レンガ造りの工場と煙突の周囲は草木も無く、殺風景この上なかつた。そこで対岸の桜の名所「桜ノ宮」に対抗して構内に桜を植え、一番花を競おうということになる。

この時に植えた桜の若木が見ごろになっていた

明治十六年四月、造幣局長（第十代）の遠藤えんどうきんすけ謹助は、

「局員だけの花見では、もったいない。市民とともに楽しもうではないか」

と、桜満開時の数日、構内を一般に開放することを提案。これがきっかけとなり、同年より総門（現在の南門付近）から入って川岸通りを抜け、柵門（裏門）へと出る通り抜けが始まった。



遠藤謹助肖像をはめ込んだ通り抜け由来碑

提案者の遠藤謹助はもと長州藩士で萩の人。幕末には井上馨・伊藤博文らとともに、イギリスに派遣された五人の秘密留学生のひとりだ。かの地で造幣技術を学び、明治日本にもたらした。

明治十四年十一月から二十六年六月まで造幣局長をつとめ、退任三ヵ月後の九月十三日、五十八歳で神戸市葺合村熊内の自宅で病没している。葬儀は大阪市北区寺町の寒山寺で行われ、墓は東京都文京区麟祥院に設けられた。

造幣局の桜は品種が多いだけでなく、珍しい里桜が集められており、平成二年四月には日本さくらの会の「さくらの名所一〇〇選」のひとつに選ばれた。これを記念し、庭の一面に遠藤肖像のレリーフをはめ込んだ、通り抜けの碑が建立され、その史実を伝えている。

なお敷地内（旧正門内）には現在の山口県小野田市（平成十七年三月よりは山陽小野田市）出身で、遠藤の後任の造幣局長を二十年も務めた長谷川為治（たけはる）の胸像がある。長谷川もまた桜をわが子のごとく育て、通り抜けを一大名所にした功労者として称えられている。

【メモ】造幣局は大阪市北区天満一一。JR大阪環状線桜ノ宮駅下車徒歩十五分、平日の一般見学可能。

長谷川為治は後年、回顧談の中で「遠藤謹助は山口県萩の者で、維新前井上弥吉（勝）、山尾庸三等と洋行し、間もなく維新と為り、一時大蔵省の通信頭（記録局長）を勤め、後造幣頭に為ったのでありますが、不運な人で、造幣局長が官吏生活の最後でありました」と述べた。明治初年に造幣頭を務め、以後出世街道を邁進した井上馨や伊藤博文と比べたのだから。

12 初代大阪駅長

関西の鉄道は明治七年（一八七四）五月十一日、大阪・神戸間の開通から始まる。

大阪の玄関口となった大阪駅は、当初「梅田ステンシヨ」の名で親しまれた。

二階建、瓦葺き、レンガ造りの駅舎は、当時としては洒落た建物だったという。場所はいまの駅舎西側、中央郵便局のあたりにあった。当時は市街地から離れており、このため駅前には列車を待つ人のための待合茶屋なども生まれた。

以前の梅田は、大阪七墓のひとつに数えられた広大な墓地である。もっと以前に泥田を埋めてできた土地なので、埋田から梅田の地名が生じたと伝えられる。

初代大阪駅長として赴任したのは、もと長州藩士で鉄道寮職員の武藤正明だ。二年前、郷里を引き払い、鉄道官吏になった。鉄道畑を選んだのは、親戚で鉄道の井上勝を頼ったからだろうか。

正明の手柄は謹厳実直だったという。幕末に進んで危地に身を投じたような形跡は見られない。ただ慶応二年（一八六六）、第二次幕長戦争のさい、芸州口で幕府軍相手に戦った記録が残る。

正明の妻はタケ（武子）といい、高杉家から嫁いできた。

奇兵隊を結成し、維新の原動力となった高杉晋作は、タケの実の兄である。

正明が大阪駅長を退いたのは明治十二年六月のこと。その後も鉄道官吏として各地を転勤し、明治二十六年に退官した。そして明治四十一年五月二十四日、東京の自宅で七十五歳の生涯を閉じている。墓は東京都営青山霊園に建てられた。



現在のJR大阪駅

時は流れて大阪駅創業百年の年。

『朝日新聞』大阪本社社会部の記者は、出身地すら忘れられていた初代駅長の面影を追ううち、晋作の義弟だったことを知る。さらに記者は、実の孫にあたる武藤梅子を千葉県に探して訪ね、その談話を聴取した。

「武おばあさんは、高杉晋作の妹だけあって、しつても非常に謹厳でした。正明おじいさんはやさしい人でお酒好き。大阪ではよく茶屋遊びもしていたそうですよ。出世にはむとんちゃくな人でした。人生を楽しむ人だったので、あまりえらくはなりませんでした」

晋作の義弟、初代大阪駅長といった肩書きを秘めながら、飄然と明治を駆け抜けた一人の防長人の生き方に、共感を覚えずにはいられない。

【メモ】大阪駅は大阪市北区梅田三一一。

創業当時の大阪駅の遺品として、大阪交通科学館（大阪市港区波除三一一一）一〇、JR大阪環状線弁天町駅下車）に展示されている大阪駅時鐘（鉄道記念物）がある。イギリス製と言われ、列車の発車五分前に合図として鳴らされていた。

13 藤田伝三郎と美術コレクション

藤田美術館は「アカガネ（銅）御殿」と呼ばれた、藤田男爵家の広大な屋敷（戦災で焼失）が建っていた大阪市都島区網島町一〇―三二にある。

仏功時蒔絵経箱・紫式部日記絵詞・玄奘三藏絵・古今和歌集断簡・曜変天目茶碗・小太刀銘国行・金銅柄香炉など、藤田伝三郎とその子平太郎の二代にわたり収集された国宝九点、重要文化財四十六点を含む美術コレクション五千点の収蔵で知られる。また庭園には、高野山光台院から移された多宝塔や、伝・奈良東大寺東塔（七重塔）礎石などの石造美術品も見られる。

大阪の大富豪として知られた藤田伝三郎は、萩城下南片河町（現在の萩市南片河町）の造り酒屋の倅として天保十二年（一八四一）五月に生まれた。幕末の頃は志士活動に身を投じ、高杉晋作に師事したといふ。

明治二年（一八六九）に長州藩陸軍局が廃止され、武器弾薬類が払い下げられるや、伝三郎はこれを引き受け、大阪に運び売却する。さらに木戸孝允のすすめもあり、実業視察のために渡欧する志を抱き、大阪にとどまり機会を待った。

ところがある日、大阪城内の陸軍局に萩出身の兵部大丞山田顕義を訪ねた伝三郎は、軍人の靴を製造してみないかと誘われる。

この話に乗った伝三郎は志を翻し、大阪で軍靴製造を始め成功をおさめた。その後、藤田組を設立して橋や鉄道、巨大工場の建設工事を請うなど、持ち前の度胸と決断力を駆使し



美術品を収集した藤田伝三郎

頭角をあらわす。明治十八年には大阪商法会議所会頭も務めた。さらに、後に日本一となる秋田県小坂銅山を買って鉱山業に乗り出し、岡山県小島湾（五千ヘクタール）の干拓事業を行うなど、東京の渋沢栄一と並び、明治日本を代表する実業家となつてゆく。あるいは明治三十年に海防資金として五万円を国に献金し、日露戦争では公債募集に尽力したため、勲二等に叙せられ、男爵を授けられた。

一方で美術品を収集したのは単なる愛玩目的でなく、日本の貴重な文化財の国外流出や損傷放置を避けたいと願つたからだという。孝心のあつた人だったが、収集に関してだけは、老母の意見に耳を傾けなかつたという逸話も残る。

伝三郎が東京に出なかつたのは、必要以上に政治と密着することを嫌つたからだ。井上馨をはじめ長州閥の元勳たちの支援を背景としながらも、醒めた目で東京との距離感を保つていたのである。大正元年（一九一二年）三月三十日、大阪網島の自宅で七十二歳の生涯を閉じた。

伝三郎らのコレクションを保存、公開すべく藤田邸倉庫の一部を改造し、藤田美術館が開館したのは昭和二十九年五月のこと。日本で二番目の私立美術館だった。いまも春秋の二回公開され、文化を愛した巨大な実業家が残した志の一端を伝承する。

【メモ】藤田美術館はJR片町線片町駅下車徒歩十分。

14 月性と長光寺

鉄筋コンクリート造りの長光寺（大阪府中央区島町二丁目）の入り口に、

「維新
史蹟 贈正四位僧月性 龍護遺跡

長光寺」

と刻んだ一本の古い石柱を見ることができると。

この月性とは西郷隆盛と鹿児島錦江湾に身投げした清水寺の勤王僧月照ではない。周防国玖珂郡遠崎（現在の山口県柳井市）の妙円寺住職で、清狂と号した月性のことである。

月性は文化十四年（一八一七）に浄土真宗の寺に生まれ、京都の本山で修行の後、諸国へ遊学。長州藩重臣に海防意見書を提出し、吉田松陰とも親交を結び、藩内各地で攘夷論を説いてまわった。その弁舌は爽快で時事に痛切だったから、聞く者の心を動かしたという。三方を海に囲まれた長州藩では、つねに外敵に対し神経を尖らせていたから、攘夷・海防論が浸透する土壌はすでにあつたのである。

月性は天保十四年（一八四三）、二十七歳の時、

「男児志を立てて郷閥を出ず。学もし成らずんば死すとも還らず。骨を埋むるに何ぞ墳墓の地を期さん。人間到るところに青山あり」

という漢詩を作り長崎から大坂に出、長光寺に三カ月ほど寄宿した。この寺の住職龍護は月性の叔父だったのだ。そして儒学者篠崎小竹が主宰する浪花塾に通い、やがて塾頭に進んだという。



月性が活動拠点とした長光寺

その後も月性は龍護の庇護のもと、長光寺を大坂方面における活動の拠点とした。近くには淀川を往来する三十石船の発着点八軒家があり、京都からの情報も入りやすかった。しかも寺は町奉行の管轄外だから、同志との連絡場所としても都合が良かった。

西洋の歴史をひもといた月性は、宗教が国家に果たす役割につき、深く考えるところがあった。そして自分もまた、仏教をもって皇室に報恩すべきだと悟る。こうして時局にかかわる何篇かの著作が生まれた。特に安政三年（一八五六）、本願寺法主広如の求めに応じて著された『護法意見封事』は、後年『仏法護国論』として出版され、広く読まれた。仏教の団結をもってキリスト教の進出を防ぎ、日本を外敵から守ろうという画期的な攘夷論である。

広如は月性の卓越した見識を認め、西本願寺別荘である京都東山の翠紅館すいこうかんへの逗留を許した。月性はここを根城に勤王家の梅田雲浜うんぴんや梁川星巖やなぎせいがんら同志たちと政治運動に奔走したが、安政四年七月、周防に帰国。

翌五年五月、四十二歳で病没した。

しかしその遺志は、高杉晋作や久坂玄瑞ら若者たちに受け継がれ、変革のエネルギーへと発展してゆく。また、月性が大坂に向かう時に作った漢詩は、明治以降も幾多の日本の若者たちに愛唱され、その胸を熱く掻立て続けたのである。

【メモ】長光寺は地下鉄谷町線天満橋駅下車徒歩五分。

15 南御堂前の切腹

元治元年（一八六四）二月二十六日、大坂の南御堂門前で、ふたりの男が生首を前に切腹し、果ててい

た。男の名は山本誠一郎・水井精一といい、ともに義勇隊に属す長州藩の下級武士である。

現場に残された斬奸状ざんかんじょうによると、同月十二日、ふたりは周防別府浦（現在の山口県田布施町）に碇泊中だった薩摩藩御用商人の船を沈め、船主の大谷仲之進を斬殺した。外国人と綿や酒を密貿易していた大谷の行為が、天皇の攘夷の方針に逆らうので、自分たちで成敗したというのだ。

この異様な死にざまは大坂じゅうの評判となる。世間は彼らを「古今未曾有の大忠臣」と絶賛し、信仰の対象にまで祭り上げた。

上方における長州人気は急騰。一方、長州藩と対立していた薩摩藩は、密貿易を暴露され、苦しい立場に追い込まれた。

だが、これが事件の真相ではない。

近年の研究により「大忠臣」は政治的に仕組まれた演出だったことが判明してきた。残された水井の遺書と関係者の回顧談によれば、それは次のようなものだ。

船を沈め、大谷を殺した犯人は実は不明だった。

そこで藩首脳部の久坂玄瑞らは、無実の山本と水井に因果を含め、大谷の首級を持ち上げさせ、いきなり自決を強要する。薩摩藩の罪を暴露して死ねば、この上なき忠節になると持ち上げ、逃げると殺害する



山本と水井が切腹した南御堂

というような勢いで追った。

あまりにもひどい話に、ふたりは逃走し、いったんは帰国する。ところが野村靖と品川弥二郎が追つて来て、藩政府とも討議し、ふたりの自決を決めてしまう。

もはや逃れられぬと観念したふたりは、無念の思いを噛み占めながら、大坂で自決することを承諾させられた。

夜更けの南御堂門前に大谷の首級をさらし、まず水井が自決。山本はぐずぐずしていたから、野村靖が介錯したのだという。

自ら死地に飛び込むのではなく、罪もない他人の死を演出し、目的を遂げようとする藩首脳部らは、もはや「志士」とは言えまい。目的のためなら手段を選ばない「政治家」だ。

山本と水井の霊は維新後、東京九段の靖国神社に祭られたが、彼らの魂は決して慰められることはないだろう。

なお南御堂は、東本願寺難波別院の通称である。

幕末当時の建物は戦災で焼失し、昭和三十六年（一九六一）に鉄筋コンクリートで再建された。

【メモ】南御堂は大阪市中央区北久太郎町四丁目、地下鉄御堂筋線または中央線本町駅下車。

16 明石藩に潜入したスパイ

播州明石城下の雲晴寺（曹洞宗。兵庫県明石市人丸町）には宮本武蔵作という庭があつた。その一角の茶室は、藩主や筆頭総代しか立ち入りが許されなかつたが、慶応二年（一八六六）のある時、ひとりの若者が転がり込む。

若者の名は伊藤俊介。徳川一門の明石藩松平家（八万石）の内情を探れとの密命を受け、長州藩から送り込まれた間諜（スパイ）である。

同年、長州再征伐が行われ、明石藩も出兵した。山陽道の要衝明石の動向は、今後の長州藩に影響を及ぼしかねないから、スパイの役目は重要だつた。

伊藤を手引きした雲晴寺の住職は、長州出身という。住職は伊藤を、明石藩の実力者で近習の手塚又右衛門の馬丁にした。

伊藤はひそかに得た情報を、明石大久保町の常徳寺に送つた。常徳寺よりは次の寺へ、さらに次の寺へと伝えられ、長州藩に届く仕組みだ。こうした情報伝達ルートは、当時、長州藩毛利家との関係を深めていた京都嵯峨の天龍寺が周旋して出来たのだという。

ある日、伊藤は大蔵谷の旅館で豊江という芸妓と出会つた。豊江は本名を梅といい、明石実相院住職の広順が、お栄という女に産ませた子だつた。

伊藤は豊江の豪胆を、豊江は伊藤の機敏を見込み、ふたりは夫婦になる。

この伊藤俊介が後年の伊藤博文であることは言うまでもない。維新後、豊江こと梅は明石に住む母お栄



伊藤が潜伏したという雲晴寺

に発行されたばかりの五円札数枚を送った。
お茶は最初札の意味が分からなかったが、隣家の主人に教えられ、神棚に供えて灯明をあけて嬉し泣きしたという。

以上は明治四十四年（一九一）出版の『西摂大観』をはじめ、明石の郷土史に出てくる話だ。ところが『防長回天史』『伊藤博文伝』といった長州側、伊藤側の文献にはまったく記述がない。取るに足らぬ創作なのか、それとも元勳がスパイ出身では都合が悪いので、抹消されたのか。

兵庫県戸籍掛の明治十年の報告書中に、雲晴寺住職についての記録があった。名は安部中巖。長門国厚狭郡吉田村（現在の下関市）土族安部権吉の三男、つまり長州出身の住職は実在したのだ。これで伊藤の話もすべてとは言わぬが、一片の真実を含んでいるような気がする。

子午線しごせんで知られる人丸山麓の雲晴寺は昭和二十年（一九四五）の戦災で全焼し、記録も失われたから詳しいことは分からない。武蔵作の庭跡には、いまマンションが建つ。

【メモ】雲晴寺は山陽電鉄人丸前駅下車徒歩五分。

17 伊藤町と初代兵庫県知事

近年は莊嚴なルミナリ工の会場として有名になった神戸市中央区加納町七丁目の東遊園地は、神戸開港当時、外国人居留地の運動場として開かれた。その西側に「伊藤町」と名付けられた旧居留地の一角がある。兵庫県の初代知事をつとめた伊藤博文にちなんだ町名である。兵庫県で伊藤は、初代宰相よりも初代知事として親しまれている。

伊藤は周防熊毛郡束荷（現在の山口県光市）の農家に生まれ、萩の足輕の養子となった。

松下村塾で吉田松陰に師事、英国に秘密留学したり、高杉晋作や桂小五郎らに兄事して政治運動に奔走したりして明治維新を迎えた。

政治家としての出発点となった兵庫県知事に就いたのは、二十八歳の明治元年（一八六八）五月だ。すでに同年一月、伊藤は新政府より外国人応接掛を拝命し、開港直後の神戸に着任していた。かつて師吉田松陰は伊藤の将来を「周旋家」と予言した。その予言どおり、外交官向きの陽気な性格と英語力を生かし、外国人との間に起こるさまざまなトラブルを解決するなど、精神的に活躍していた実績が認められたのだ。四六に分けたザンギリ髪で蝶ネクタイをしめ、白馬にまたがって神戸を闊歩するようになった伊藤は、市民から「坊主奉行」のニックネームが与えられた。知事時代の伊藤の月給は五百円で、これは現代の数千万円以上の価値がある。しかし同年十二月、政府に廃藩置県を建白したことで反発を受け、その座を退いたのが翌二年四月だから、一年足らずの在任期間だった。

伊藤が住んだのは現在の神戸市中央区北長狭通にあった橋本藤左衛門の別荘「橋本花壇」だ。



兵庫県政史のスタートを飾る伊藤（左）らの写真

この家の庭で伊藤は中島信行（土佐藩出身、兵庫県判事）、アーネスト・サトウ（英国外交官）と共に写真を撮っている。

伊藤は鬘を結び、着物姿で大小の刀を腰に差して立つ。鋭い眼光から、青年知事のほとばしる覇気が感じられる。

県庁に近い兵庫県政資料館（県公館。神戸市中央区下山手通四丁目）は、この写真を大きなパネルにし、展示室の最初に掲げる。兵庫県政史の中で伊藤がどんな位置を占めているのかを、如実に示していると言えよう。

【メモ】伊藤町はJR三宮駅から市役所方面に徒歩十分。兵庫県政資料館は地下鉄県庁前下車。

ただし明治元年五月に誕生した当時の「兵庫県」の範囲は、現在の神戸市と西宮市にまたがる程度である。

他に山口県出身の明治期の兵庫県知事には内海忠勝（吉敷毛利家家臣出身）・周布公平（長州藩出身、政之助嗣男）・服部一三（吉敷毛利家家臣出身）がいる。とくに服部は明治三十三年から十七年間の長きにわたり兵庫県知事の椅子にあり、退官後も神戸に残って各種公共事業に尽力、昭和四年（一九二九）一月二十五日、七十九歳で没している。

18 楠木正成墓所

「楠公なんこうさん」として神戸市民に親しまれている湊川神社（神戸市中央区多聞通二丁目）の創建に、初代兵庫県知事の伊藤博文が尽力している。

楠木正成墓所に神社を創建せよとの詔勅が発せられたのが明治元年（一八六八）四月のこと。伊藤は「量地及社殿の規模輪奐等」に尽くし、「当社の創造者」と評される（神田兵右衛門筆の碑文、『湊川神社史・鎮座篇』所収）。社殿造営は同五年一月から始まった。

楠木正成はいまから七百年ほど前、南北朝時代を生きた武将だ。後醍醐天皇に反旗をひるがえした足利尊氏と戦うも敗れ、延元元年（一三三六）、摂津湊川で自害した。

正成の墓は最初、田畑の中の小さな塚だったが、江戸時代はじめ、尼崎藩主が五輪塔を建立した。さらに水戸の徳川光圀が正成を「勤王の忠臣」と高く評価し、顕彰に乗り出す。

元禄五年（一六九二）には、正面に光圀筆「嗚呼あゝ忠臣楠なん氏なんし之墓の」の、裏面に朱舜水の撰文を刻む立派な墓碑を建立した。

幕末になると水戸学などの影響から、正成人気は「勤王の志士」たちの間で急騰する。特に長州藩では熱烈な正成信奉者がいたが、中でも吉田松陰は特別だった。時空を超え、正成と自分の心は通じているのだと信じ、こんな一文を書いている。

「私は、かつて東方へ遊行し、三度も湊川を通ったが、そのさい楠公の墓に参拝し、涙が落ちるのをとめることができなかつた。その碑の背面に、明の朱舜水が書いた文を読んで、また涙した」（中央公論社版

『日本の名著・吉田松陰』

熱弁をふるい正成を語る松陰の影響は、門下生たちにもおよぶ。

高杉晋作は楠樹と号し、奇兵隊で楠公祭を行った。

東奔西走する桂小五郎や久坂玄瑞も、長州藩に加担して都落ちした三条実美ら七卿も、みな湊川に立ち寄っている。

湊川の正成墓所は、時代の壁に挑もうとする若者たちの精神的なよりどころとなっていたのだ。

その系譜に連なる伊藤博文が、政治家としてのスタートを切ったのが神戸というのも何かの因縁かも知れない。

湊川神社の社殿左手奥には、明治二年九月に伊藤が寄進した、高さ一メートルほどの石灯籠一対が残り、「大藏少輔従五位兼民部少輔 越智宿禰博文」

と大袈裟な肩書が刻まれている（ただし伊藤は、明治二年四月に兵庫県知事を辞している）。

楠木正成は伊藤にとり、故郷の師友の思い出につながる存在だつたに違いない。

【メモ】湊川神社はJR神戸駅下車徒歩五分。

境内の宝物館には伊藤が初代宮司折田年秀に贈った漢詩とその添状や、吉田松陰と親交のあった安芸の人宇都宮真名介（黙霖）が、久坂玄瑞を弔った漢詩書も展示されている。



伊藤博文が楠公墓前に寄進した石灯籠

19 倒された伊藤博文銅像

日本におけるヨーロッパ式銅像の第一号は、東京九段下の靖国神社に明治二十六年（一八九三）に建てられた大村益次郎の銅像（大熊氏広作）である。以後、全国各地に軍人や政治家の銅像が続々と出現した。神戸でも明治三十七年（一九〇四）、湊川神社（神戸市兵庫区多聞通二丁目）に存命中の伊藤博文の銅像が建てられている。

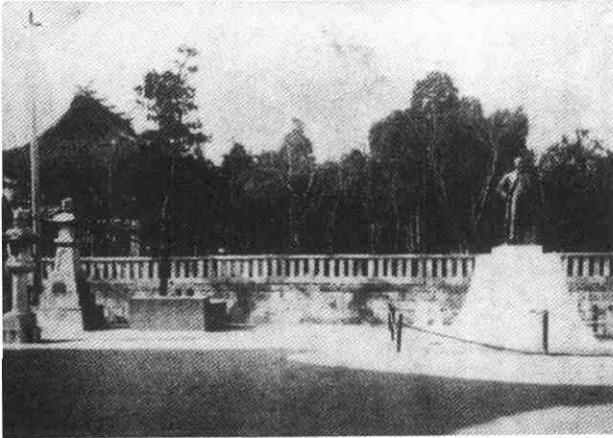
初代宰相をとめるなど栄達を極めた伊藤の、政治家としての出発点は、明治元年に任命された兵庫県知事だ。だから兵庫県民は、自分の村から巣立った青年が出世したような誇りを、伊藤に対して抱き続けている。

残された写真で見ると、伊藤銅像は本殿右に、フロックコートの前を開け、左手に憲法草案を携え、右手を腰に置き、ポーズを構えて立つ。等身大よりやや大きい感じだ。

ところが、この伊藤銅像は建立わずかで悲惨な「最期」を迎えることになる。日露戦争は明治三十八年九月五日、ポーツマス条約の締結をもって終結をみた。しかし、日本は戦勝国だったにもかかわらず、賠償要求を放棄するなど、譲歩もせねばならなかった。

戦勝の見返りが無く、裏切られたと憤る民衆はその日、「日比谷焼き打ち事件」を起こし、「弱腰外交」の元凶として、小村寿太郎全権大使や伊藤博文元総理をやり玉にあげた。

神戸でも七日夜、湊川神社前の大黒座で河野広中らによる「反対派の演説会が開かれ、集まった千数百の民衆を煽り立てた。



ありし日の湊川神社の伊藤博文銅像（写真右）

興奮した民衆はその足で湊川神社境内に殺到し、伊藤銅像に鉄の鎖を掛けて引き倒してしまった。そして金づちでたたきながら口々に、

「伊藤は助平だから福原遊郭を引き回した上で、海に放り込んでしまえ！」

などと罵り、本当に海まで持ち去ろうとした。

暴徒と化した群衆に、警察も手の施しようがない。

それでも海岸近くでようやく奪い返し、水上署派遣の護衛艇に守られ、神戸の東部、灘にあつた服部一三知事の別邸に運び込み庭に隠した。

そうして世論が静まるのを待ち、昭和五年（一九三〇）十月になり伊藤

銅像は山口県萩市の伊藤旧宅の庭に移される。しかしここも安住の地ではなかつた。戦時中の金属供出で失われたのだ。

戦後、萩では残された台座の上に、萩焼の伊藤陶像をすえて、今日に至る。

伊藤の人氣、評価の変遷をまともに受けた銅像であつた。

20 大倉山と伊藤博文銅像

伊藤博文が明治四十二年（一九〇九）十月二十六日、ハルビン駅頭で暗殺されると、神戸市民の間に大きな衝撃が走った。初代兵庫県知事をつとめ、のちに神戸港大改修に尽力した伊藤は、神戸の恩人として親しまれていたのだ。

存命中の明治三十七年には、湊川神社に早くも伊藤銅像がお目見えしたが、日露戦争終結時の狂乱の中で、失われたままであった。

そこで神戸新聞社や伊藤と親交のあった兵庫町人神田兵右衛門、専崎弥五平らが主唱し、再び神戸に伊藤銅像を建てる計画が持ち上がる。

これを聞いた東京在住の政商大倉喜八郎は、銅像建設地として自分の神戸の別荘地を神戸市に寄付した。大倉は生前の伊藤と特に深い交流があったのだ。

寄付された大倉の別荘地は、古くから安養寺山と呼ばれ、松の木が生い茂り、港の全景を一望のもとにおさめていた。神戸市所有となった後は、二千坪からなる大倉山公園（神戸市中央区楠町）として一般開放される。

その一角に明治四十四年十二月二十六日、伊藤博文銅像が建立された。作者は数多くの銅像を手掛けた彫刻家小倉惣治郎である。銅像の伊藤は明治二十二年の憲法起草の際、得意満面で立つ姿だ。

ところが昭和十七年（一九四二）、戦時中の金属供出の難に遭い、台座だけを残して伊藤銅像は姿を消してしまう。



大倉山公園に残る伊藤博文銅像台座

残された写真（本書扉参照）を見ると、古代ギリシャの神殿のような台座の上に、フロックコート姿の伊藤銅像が建っている。ちなみに台座は、のちに大阪城再建や山口県庁舎・国会議事堂設計にも参加した建築家武田五一の作品である。

現在も大倉山公園は、市民の憩いの場だ。市立中央図書館や神戸文化ホールなどが設けられ、神戸文化の発信地でもある。

ところが伊藤銅像が、かつては公園の主だったことを知る市民はほとんどいない。周囲を金網で囲まれた台座だけが、公園の片隅にさびしく残る。説明板すらない。

台座のすぐ近くには、神戸にある全国各地の県人会が、それぞれの故郷の樹木などを植えた「ふるさとの森」がある。山口県は昭和四十九年（一九七四）に「山口県ふるさとの森」として、神戸防長尚友会によってつくられた。山口県から運ばれた大理石を中心に、夏ダイヤやキンモクセイが植えられている。

花の季節になると伊藤の故郷の香りが、かすかに台座の周りに漂う。

【メモ】大倉山公園は地下鉄大倉山駅下車すぐ、あるいはJR神戸駅下車徒歩十分。ちなみに銅像建設を主唱した専崎弥五平は神戸宇治川口の西側に居を構えていた豪商で、幕末には長州藩の御用を務めた。屋号を鉄屋という。文久三年（一八六三）八月の七卿落ちの際も、専崎が船を仕立てて弁天浜（神戸市中央区弁天町）から周防三田尻に逃がした。あるいは「禁門の変」後、長州兵を匿ったため捕えられ、釈放後は長州藩に亡命して維新を迎えた。

21 親王塚と毛利家

阪神電鉄の打出駅うちでから北へ十数分歩くと、兵庫県芦屋市の閑静な住宅街の一角（翠ヶ丘町）に親王塚と呼ばれている円形の古墳がある。直径三十六メートル、高さ三メートルで、大きな松に覆われ、うっそうとしている。近年では「芦屋十景」のひとつにも選ばれた。

ここに眠る阿保親王は、平城天皇の第一皇子だ。

葉子の乱に連座して太宰府に流されたり、承和の変の密告者になるなど、波乱に富んだ人生を送り、承和九年（八四二）、五十一歳で没。親王は風光明媚な打出の地を愛し、邸宅もかまえていたから、ここに埋葬された（塚自体は古墳時代に築かれた円墳を再利用したと考えられている）。また、邸宅跡には親王寺（芦屋市打出町）が建立された。

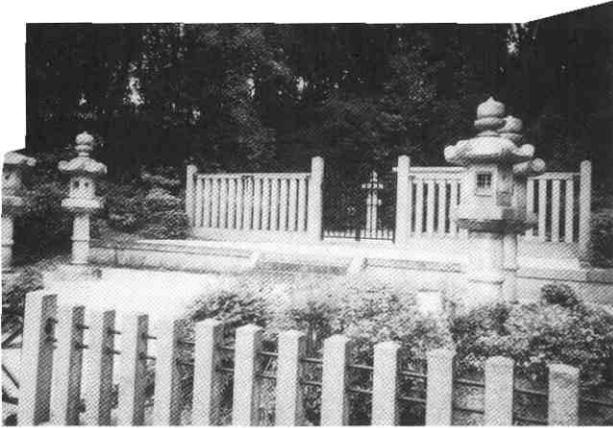
阿保親王の落胤らくいんである音人は、大江氏を名乗った。

その子孫になるのが、鎌倉幕府開府に尽力した大江広元だ。広元の四男季光すえみつは毛利を名乗り、さらにその直系が後年、長州藩主となる毛利家なのだ。

第一皇子は一品親王いっぴんのおうと称される。毛利家は阿保親王末裔の証しとして、家紋を「一品」をデザイン化した「一に三ツ星」とした。

元禄四年（一六九二）、長州藩主毛利家は、親王八百五十回忌にあたって塚の周囲を改修し、皇族の子孫であることをアピールしている。

幕末、長州藩が京都に足場を築き、朝廷の力を背景に幕府と対決出来たのも、こうした歴史と無縁では



毛利家の先祖阿保親王塚

ない。

大政奉還後の慶応三年（一八六七）十一月二十九日、長州藩軍艦七隻は芦屋打出浜に到着し、奇兵隊や遊撃隊の兵士一千二百人を上陸させた。これは長州藩が上方に送り込んだ、討幕軍の第一便だ。

最初、この軍勢は隣の西宮に上陸する予定だった。しかし西宮には幕府軍が駐屯していたので、無用の摩擦を避けるため、急ぎよ隣の打出に変更されたのだ。

偶然とはいえ、因縁めいたものを感じずにはいられない。総督の毛利内匠は親王寺を本陣とし、兵士は打出下町の商家に分宿した。

数年前、長州藩は兵庫警備を担当したことがあり、この辺りはなじみも多く、人気も高かった。だから多数の軍勢が突如現れても、人心は動揺しなかったという。やがて朝廷の命により京都に入った長州軍は、薩摩軍と合流して戊辰戦争に参加することになる。

なお、親王塚前には毛利家が寄進した石灯籠四対があった。しかし平成七年一月の大震災で一対が失われてしまう。この辺りは地震の被害が甚大だったのだ。

【メモ】親王寺には宝永年間（一七〇四〜一一）、親王塚から出土した七面分の銅鏡のうち、二面の鏡と二面分の破片が伝わる。

あるいは嘉永四年（一八五二）三月十八日、江戸遊学に赴むく途上の吉田松陰が、阿保親王塚を訪れたという記述が「東遊日記」に残る。

22 平磯灯標とセメント

JR山陽本線の塩屋駅しおやを過ぎ、垂水駅たるみへと向かう列車の車窓から明石海峡を眺めていると、垂水沖に突っ立っている灯台が見えてくる。

このあたりは平磯と呼ばれ暗礁が多く、古くからたくさんの船が難破した難所として知られた。

江戸時代にも何度か木製の灯標が建てられたが、潮流が時速十キロと速く、すぐに流されてしまったという。

幕末の文久三年（一八六三）一月には、薩摩藩の汽船が暁の濃霧に針路を誤り、この暗礁に乗り上げて沈没したこともあった。

そこで明治二十六年（一八九三）十一月、英国人技師の指導で、この地に鉄筋コンクリート造りで円形の堅固な灯台「平磯灯標」が造られた。

昭和四十一年（一九六六）からは太陽電池を電源に閃光光を出し、航海する船が近寄らぬよう注意を發している。またサマセット・モーンの小説『ア・フレンド・イン・ニード』にも登場する灯台としても知られる。

さて、この平磯灯標の築造に使われたのが、現在の山口県小野田市（平成十七年三月からは山陽小野田市）で生産されたセメントなのだ。

開かれて間もない小野田新開作の南端に、笠井順八がセメント工場を設立し、「セメント製造会社」（のち小野田セメント、現太平洋セメント）と命名したのは、明治十四年五月のこと。維新により没落した士

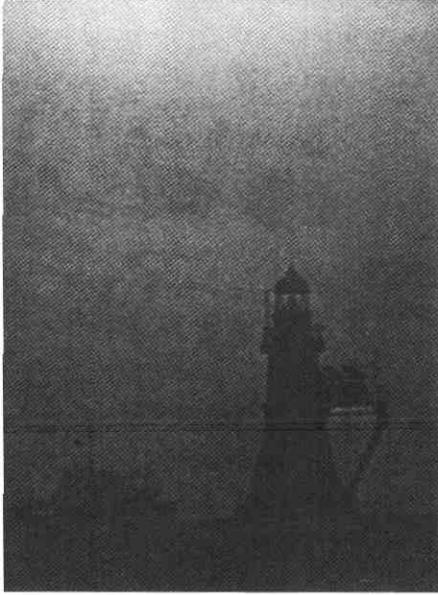
族の救済が、おもな目的である。笠井はもと長州藩士で萩出身、所帯方や郡奉行本締役を務め、財務に明るかった。明治八年頃、山口の協同会社倉庫の建設にセメントが使用されているのを見て、その製造を志したという。

当時、セメントは大半が輸入品で、わずかに東京深川に官営のセメント製造所が一カ所あったにすぎず、小野田は日本最初の民営セメント工場だった。

この地方は粘土地帯で、泥土、石炭、石灰石に恵まれていた。しかも二十キロ西には関門の貿易港や市場もあったから、臨海工業の適地だったのだ。

いまも小野田市の工場内に残る創業時の焼成炉は、その形から徳利窯と呼ばれた立窯だ。この中で消石灰と粘土を混ぜ合わせた原料と燃料の石炭を詰め、七昼夜かけて焼き上げる。出来た塊をセメントの粉末にし、セメント樽に詰めて出荷した。いわゆる湿式製造法で、明治十六年九月に初めて製品を出した。

今日も紅灯を点滅させながら、平磯灯標は防長と関西の近代史を無言で伝えている。



垂水沖の平磯灯標

23 生野の「南八郎さん」

姫路からJR播但線ばんたんに乗り、約一時間揺られて山間部に入ってゆくと、兵庫県朝来郡生野町あきこに着く。江戸時代は幕府の直轄領で、銀山を中心に栄えた地だ。

生野にはいまも「南八郎さん」と呼ばれ、崇められている神様がいます。

南八郎とは長州藩士河上弥市の変名だ。萩出身の河上は高杉晋作の信任があつく、奇兵隊の二代目総督をつとめた。

幕末、福岡脱藩の平野国臣くにぢみは但馬（兵庫県北部）の豪農と結び付き、攘夷のための農兵を組織。平野はこの農兵を使い、大和地方（奈良県）の山中で幕府の追討軍相手に苦戦中の天誅組てんせいくみを助けようとする。天誅組は大和行幸の先鋒として挙兵したが、文久三年（一八六三）八月十八日の政変で長州藩が一掃されるや、後ろ盾を失い苦境に陥っていたのだ。

間もなく天誅組は壊滅したが、長州藩を脱して平野らと共に計画を進めていた河上弥市ら奇兵隊激派は、公卿の沢宣嘉さわのぶよしを擁し、十月十一日、農兵二千人と生野代官所を襲撃、十二日未明に占領した。

ところが幕府の命令を受けた姫路藩や出石藩の軍勢が南北から進撃を始めると、拳兵側の結束が乱れる。十三日、沢は生野を脱出。北方を固めていた河上ら十三名の強硬派も、農民に離反され、脱出不可能と悟り、十四日、隣の山口村（朝来郡朝来町山口）の山伏岩という巨石の上で自害した。

まず、二十一歳の河上が腹を切った。

続いて奇兵隊の西村清太郎・井関英太郎・伊藤百合五郎・白石廉作れんさく・小田村信之進のぶのしん・久富豊よしみゆみ・下瀬熊之



生野代官所跡に建つ「生野義挙趾」の碑

進・長野熊之丞・和田小伝次、筑前秋月の戸原卯橘うづき、京都（河内とも）の永田左衛門、生国不詳の草我部某が次々と果てた。大半が十代、二十代の若者たちである。彼らには帰る場所が無かったのだ。

河上は死ぬ直前、

「議論より実じつを行へなまけ武士国の大事を余よ所に見る馬鹿 皇国草莽そうもう之臣南八郎」

と高札に書きなぐった。新時代の導火線ともいふべき憤死だ。

こうして「生野の変」（生野義挙）と呼ばれる事変は数日で終わる。

彼らの遺骸は山伏岩の傍らに埋められた。そしてこの地は「南八郎さん」と呼ばれ、特に「難病平癒に効く」と近隣の農民たちの信仰を集めてゆく。裏切った農民たちには、後ろめたさもあつたらうし、祟りも怖かったのだろう。

数年後、維新とともに「殉節忠士之墓」（西園寺公望書）と刻んだ墓碑や祠が設けられ、さらに山口護国神社となつたが、地元ではいまも「南八郎さん」の方が通りがよい。

また生野代官所跡（生野町口銀谷くろがなや）には、昭和十五年（一九四〇）、「生野義挙趾」と刻んだ巨碑が建立された。生野駅に近い、町立生野小学校の隣接地である。

【メモ】山口護国神社はJR播但線生野駅または新井駅からタクシー。

24 山田顕義と生野銀山

文久三年（一八六三）十月、奇兵隊総督だった河上弥市は数名の隊士とともに長州藩を脱し、現在の兵庫県朝来郡生野町で挙兵するも、敗れて自決した。

時は流れて明治二十五年（一八九二）、河上の一歳年少の従弟で、明治の元勳となった山田顕義（市之允）が、生野を訪れている。

山田は長州藩士の子として長州萩に生まれ、吉田松陰に師事し、討幕戦争で活躍。とくに箱館五稜郭の戦いでは旧幕軍攻略の指揮をとり、功を立てた。維新後は陸軍中将や伯爵に列せられ、初代司法大臣をつとめた。

その頃、山田は失意の中にあつた。提唱した法典の実施が遅れ、大津事件の後始末が思うようにならず、しかも病気がちだったからだ。

そこで司法大臣を辞し、同年十月からは山口県に帰省していた。生野を訪れたのは、再び東京に戻る途中である。

山田は十一月十日朝、姫路から人力車で生野に赴き一泊。翌十一日、河上の墓参を済ませ、生野銀山を視察した。ところが太盛三番坑道入り口で突如倒れ、そのまま亡くなる。享年四十九。

山田の死には、いまでも謎がつきまとう。

肺炎や心臓麻痺といった病死説もある。が、生野では昔から坑道に転落したという事故死説が囁かれている。皇室財産（宮内省御料局所管）の銀山で、元勳が事故死ではよろしくないので、秘されたというのだ。



生野に建つ「山田顕義終焉之地」の碑

昭和六十三年（一九八八）、東京護国寺の山田墓所が発掘された際、頭蓋骨に大きな外傷が確認された。これは死亡当時、医師山根正次まきつぐが作った記録にも無い傷で、謎は深まるばかりだ。

山田の事跡には、現在の日本大学の前身日本法律学校や、國学院の創立がある。こうした、後進の育成に心を砕いた一面は特筆されるべきだろう。

日大では山田を学祖と仰ぎ、顕彰、研究活動も盛んだ。萩市の旧宅跡には銅像が建てられ、周囲は公園化され、顕義園けんぎえんと名付けられている。

ひとりの長州人の死にまつわる謎を残しながら、生野銀山は昭和四十八年に閉山され、史跡は観光坑道として公開されている。その入り口に平成元年、日大が創立百周年を記念し「山田顕義終焉地」（日本大学理事長柴田勝治書）の石碑を建てた。

【メモ】生野銀山は朝来郡生野町小野字大谷筋三三一五、JR播但線ばんたん生野駅からバス小野下車。ノミの跡も生々しい観光坑道の他、鉱山資料館・吹屋資料館・生野鉱物館などがある。銀山の歴史は千二百年の長きにわたり、その間に掘り進んだ坑道の総延長は三百五十キロメートル以上、深さは一千メートルの深部にまで達する。

25 長州藩の兵庫警備

長州藩の領土は三方が海に囲まれていたから、外敵に対する危機感は特に強かった。

幕末には海防意識が高まり、軍備が強化される。外国勢力を排除しようとする攘夷運動が盛んになったのも、こうした地理的条件によるところが大きい。

その成果が表れたのは嘉永六年（一八五三）六月、アメリカのペリー艦隊来航時だ。あわてた幕府は各藩に江戸湾警備を命じたが、長州藩ではただちに三門の火炮と百挺の和銃で武装した兵士五百人を大森海岸に出動させることが出来た。

こうして幕府の信頼を得た長州藩は、はじめ相模（神奈川県）の、続いて安政五年（一八五八）六月からは兵庫の警備を命じられる。兵庫は開国に反対する朝廷がある京都に近く、その役目は重大だった。

長州藩に任せられたのは、現在の兵庫県西宮市武庫川から神戸市須磨にかけての約三十六キロにおよぶ海岸線で、三千人の兵力が配置された。いずれも幕府直轄の天領である。

長州藩ではこれを機に、阪神間の土地を領地として払い下げてもらおうと幕府に願ひ出た。アメリカとの間に結んだ通商条約で、兵庫は国際貿易港として開かれることが決まっていたし、京都・大坂にも近い交通の要衝でもあったからだ。あらゆる面で将来の発展が約束された土地だったのである。

だが、幕府はこれを認めなかった。

長州藩の陣営は打出村（芦屋市）と東須磨村（神戸市須磨区）、それに五毛村海蔵寺（神戸市灘区国玉通三丁目）に設けることが許され、藩士たちは各地の寺などに分宿した。



長州兵が駐屯した海蔵寺（左）と薬仙寺

萩から動員され、薬仙寺（神戸市兵庫区南逆瀬川町）に駐屯した下級武士能美豊治（のうみとよはる）の日記が残っている。それによると、武芸の稽古に励んだり、大砲の試射をしたり、近所の社寺に参ったり、時には有馬温泉（神戸市北区）に遊んだり、一兵卒はなかなば行楽気分でのんびりとした生活を送っていたように見える。また、長州藩は民心獲得のため大金を使うことも惜しまなかった。文久三年（一八六三）二月、毛利家の先祖である阿保親王の臨時祭を行い、親王塚のある打出村の住民を招き酒を振る舞い、貧しい者には金銭を与えた。

だが長州藩は同年六月、自ら願って国もとへの撤退を始める。経済的負担が重すぎたことと、下関で外国船砲撃が始まったからだ。それに領地として払い下げてもらえない以上、メリットも乏しかった。

こうして五年におよぶ長州藩の兵庫警備は終わった。しかし、この仕事は無駄ではなかった。阪神間の地形を調べ尽くしていたこと、民心を獲得していたことが、後年の討幕の戦いの際、大いに役立つことになったからである。

【メモ】海禅寺はJR三宮駅または新神戸駅からバスで五毛天神下車。薬仙寺はJR兵庫駅からバス松原三丁目下車。

26 光村弥兵衛と神戸 (上)

現在では横浜と並ぶ国際貿易港として知られる神戸。

だが、維新直前の慶応三年（一八六七）十二月に開港するまでは民家五百戸、回船問屋数軒、酒蔵十数戸が並ぶ、西国街道沿いの小さな港町にすぎなかった。

開港とともに、一獲千金を狙った商人たちが、神戸（兵庫）に集まって来た。現在の山口県光市出身の光村弥兵衛もその一人である。

弥兵衛は文政十年（一八二七）、豪農の家に生まれた。だが商人になる道を選び、十七歳で郷里を飛び出し、はじめ木綿や肥料を商った。

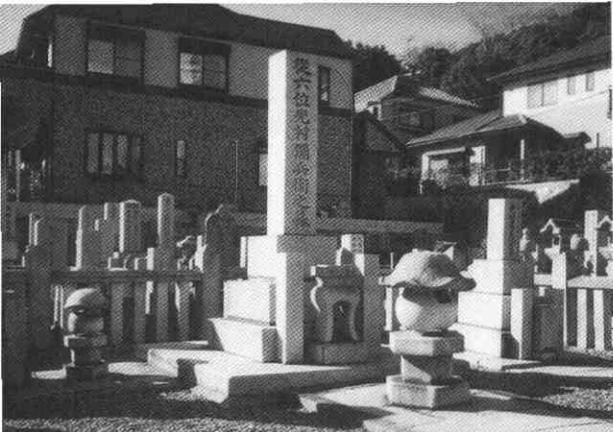
さらに堅ヶ浜（山口県熊毛郡平生町）で塩田を営んだが、暴風雨で大打撃を受けて失敗。旅費十両を持って、逃げるようにして大坂に向かう。

ところが大坂では適職が見つからず、弥兵衛は関西や中国地方の各所を転々とせねばならなかった。

そんな弥兵衛に開運の兆しが見え始めるのは、安政六年（一八五九）、神奈川開港あたりからだ。横浜で外国船相手に生活必需品を販売し、商売を拡大したのである。

さらに元治元年（一八六四）には、洋銀両替商を開いて成功をおさめ、はじめて上流社会への仲間入りを果たした。

時代の先を読むことに機敏だった弥兵衛は開港されると知るや、慶応三年（一八六七）二月、本拠を神戸に移し、「長門屋」を開き機会をうかがう。まずは、横浜で身につけた英語やフランス語を駆使し、西洋



神戸市祥福寺の光村弥兵衛墓

小間物を売った。長門屋は海岸近くにあつたため、ある人が心配して転居をすすめたことがある。弥兵衛は「一旦大風激浪を起して我家を波上に捲き去らば、余は座して泰西万里の邦に遊ぶことを得んのみ」と豪快に笑つたという。

さらに明治元年（一八六八）、初代兵庫県知事となつたのが、長州藩出身の伊藤博文であつたことが、弥兵衛に新たななる飛躍の機会を与える。

実は、弥兵衛と伊藤は知らない間柄ではない。

幕末の頃、秘密留学生に選ばれた伊藤ら五名は横浜に潜伏し、渡英の機会をうかがつていたことがある。

これを察知した幕府は、弥兵衛ら横浜商人に詮索を命じた。ところが弥兵衛は密航計画を確信したが見逃し、幕府には知らせなかつた。

こうして伊藤らは、志を遂げることが出来たのだ。

兵庫県では明治二年、弥兵衛に廻船商社差配方を命じ、神戸港における外国船運送の取り扱いを託した。

これを皮切りに弥兵衛は草創期の神戸港を、まさに牛耳つてゆく。通商・為替の全権を手に入れ、関西三十三ヶ藩の御用達となり、郵便事業を始め、出入国の管理も行うようになった。『従六位光村弥兵衛伝』（明治二十七年）には「而して神戸・大阪は即ち君（弥兵衛）其命を受け、以て海
外通商上の全権を掌握するの有様なりき」と述べられている。

27 光村弥兵衛と神戸 (下)

明治三年（一八七〇）、造幣頭として大阪に赴任して来たのは、長州藩出身の井上馨だった。

井上もまた、かつて光村弥兵衛に助けられた秘密留学生のひとりである。

井上は造幣寮の所有船である運貨丸うんかまるの運営を弥兵衛に委託し、さらに明治五年には同船を弥兵衛に払い下げた。

これを機に弥兵衛は商船六隻を購入し、大阪・中国・四国・九州に定期航路を開き、西日本の海運権を握る。潮待ち、風待ちの不定期航路の時代だから、画期的な事業で、後に大阪商船株式会社へと発展してゆく。

続いて弥兵衛は明治七年、高島炭鉱を引き受け、翌八年には後に大阪商船学校の前身となる学校設立を提案する。他にも大阪に日本初の硫酸製造会社を設立したり、神戸洋銀取引所・山陽鉄道株式会社・南海鉄道株式会社・共同運輸株式会社など、十社をこえる会社設立に関わり、関西実業界の巨頭へと急成長を遂げた。

明治十年、鹿兒島で西郷隆盛を首領とする不平士族が蜂起し、西南戦争が起こるや、神戸は政府軍の兵站基地になる。兵士と労働者で溢れ、山県有朋・鳥尾小弥太とりおこやた・川村純義すみよし・木戸孝允きとたかむ・伊藤博文ら軍や政府の首脳が神戸に集まったのだ。

これが、建設期が終わり、沈滞していた神戸の景気に活気を与える。半年あまり続いた西南戦争で、政府の戦費四千五十六万円のうち、八百九十一万四千円が大阪・神戸に運送費として落ちたというから、膨



光村弥兵衛が明治21年、湊川神社に寄進した大石灯籠

大なものだ。しかも、神戸の港湾としての重要度があらためて認識され、政府はその整備に力を入れることとなる。

弥兵衛は持ち船六隻をフル稼働させ、軍事輸送にあたり巨利を得た。だが、弥兵衛のが旧式の外輪船なのに対し、三菱の岩崎弥太郎の船はスクリーナー式の最新式だった。

弥兵衛は時代から取り残されようとしていた。

しかも翌十一年には白内障を患い、十三年には失明のため一切の事業から引退する。また五十四歳だった。それからの弥兵衛は、あらゆる社会福祉活動に寄付を続けた。

菩提寺の臨済宗祥福寺（神戸市兵庫区五宮町）に多宝塔を建立（現存）。神戸小学校・東山避難病院・神戸区役所・神戸幼稚園の設立にも多額の寄付をしている。

日清戦争前には政府に二万円を寄付し、従六位を贈られた。あるいは明治十八年には故郷光井村（山口県光市）玉振小学校の新築費用百五十円を出している。一連の寄付合計額は二千数百円にもものぼると記録されている。

こうして弥兵衛は神戸において明治二十四年二月二十日、六十四歳で他界した。いまも祥福寺の墓地に、愛した神戸港を見下ろしながら眠っている。

【メモ】祥福寺はJR三宮駅あるいは神戸駅からバス五宮町下車。同寺には明治元年一月、長州藩の軍勢が神戸警備のため駐屯したこともある。弥兵衛の嗣子光村利藻は現在も教科書出版として知られる光村図書を興した。

28 残念さん参り

阪神電鉄大物駅近くの大物公園の北東に、東墓ひがしぼかという共同墓地（兵庫県尼崎市杭瀬南新町）がある。その入り口近くに、「残念さん」と呼ばれる墓が建つ。いつも線香や花が供えられ、近隣の信仰を集めている様子がうかがえる。

墓の主は山本文之助鑑光という、長州藩の下級武士だ。墓前には「長州」と刻む線香立てもある。

山本は銃隊の一員として元治元年（一八六四）七月十九日の「禁門の変」に参戦し、敗れた。幸い戦場となった京都を脱出することに成功した山本は、西国街道から神崎川に至り、南下して翌二十日には尼崎大物北ノ口まで逃れて来る。

ところが上陸した山本は、幕府の命により警備をしていた尼崎藩の役人に捕らえられ、牢に放り込まれてしまう。

尼崎藩は長州藩と同じ勤王藩であると信じていた山本は、弁明につとめたが、相手にされない。そこで隙を見て、

「残念、残念」

と叫びながら自害して果てた。二十九歳だった。

なお、この話には後日談がある。

翌慶応元年（一八六五）二月ごろから、山本の墓は「残念さん」と呼ばれ、大坂町人たちの間で爆発的な信仰を集めるようになったのだ。



「残念さん」として信仰される
山本文之助墓

願を掛けると、どんな大病でも全快するとの俗信が流布し、大群衆が詰めかけ、尼の渡しは大混雑した。五月に入るとピークに達し、大坂から尼崎までの約十二キロの道に参拝者の列が続いた。

見かねた幕府は、五月十七日限りで残念さん参りを禁じ、参道の橋を壊す。それでも船を使ったり、回り道をして参拝者は押し寄せた。

幕府はついに山本の遺骸を掘り出し、捨てた。

この時、人夫が遺骸から金のキセルと金の止め具付きのタバコ入れをくすねた。すると人夫の顔はゆがみ、死ぬまで元に戻らなかつたと伝えられる。

五月二十五日には長州藩征伐のため、将軍家茂いよもちが大坂城に入った。

ところがその夜から、今度は「禁門の変」直後に取り壊された長州藩の大坂蔵屋敷跡（大阪市西区土佐堀一―五）の柳の木へ人々が参り始める。柳の葉を煎じて飲むとどんな病でも治るとされ、大いに賑わった。

激怒した幕府が、またもや参詣を禁じる触れを発したのは言うまでもない。

こうした現象は、民衆の変革願望の表れで、独自の幕府批判であると評される。しかし近年の研究では、その背後に長州藩首脳部の民心収攬を意図した作為があったことも指摘されている。

29 鳥尾小弥太とその父

奇兵隊の鳥尾小弥太は萩城下の出身で、隊内きつての暴れん坊として知られていた。

本当の名は中村鳳輔といったが、鎌倉武士のような勇ましい名をと、変名を使った。

ところが明治元年（一八六八）一月、鳥羽・伏見の戦い後に藩主から与えられた感状に「鳥尾小弥太どのへ」とあり、元に戻せなくなってしまったのだという。

以後は鳥尾小弥太が本名となり、陸軍中将・貴族院議員などを務め、子爵に列せられた。

そんな小弥太の「泣きどころ」は、幼少の頃、死別した父の思い出である。

小弥太の父、長州藩士中村宇一右衛門は安政五年（一八五八）三月、十二歳の小弥太を連れ、参勤交代で江戸に赴いた。ところが宇一右衛門は翌六年五月、急用で藩主世子に従い、江戸から一旦帰国することになる。宇一右衛門は、

「往復三カ月かかるが、お前は我慢してこの地に居残りなさい」

と小弥太に言い残し、江戸から旅立つ。しかし道中、流行していたコレラにかかり、いまの兵庫県加古川市の菊屋という旅館で数日療養したすえ、亡くなってしまった。

小弥太は後年、この父のことを、

「すこぶる厳正な人で、余が幼少の時、ずいぶん厳格なる家庭の教育を受けしように思う」と回顧している。

二度と帰らぬ父を、江戸で一人待ち続けた小弥太の胸中は、察するにあまりある。それだけに、栄達を



光念寺に残る鳥尾小弥太墓（最前列の中央）

遂げても追慕の念は募るばかりだった。

ある時、東京から加古川に墓参に出かけた小弥太は、父の最後を看取った旅館の女房という老婦人と会った。老婦人は宇一右衛門が臨終のおり、

「江戸に子供を残して来たことが気にかかる。そのほかは何も気にかかることはない」

と遺言したと話す。さらに老婦人は元勲となった小弥太を前に、

「まったくあなたのことではありませんか」

と、感慨深げだった。

話を聞いた小弥太は涙し、自分が死んだら加古川光念寺の父の墓に葬るよう遺言する。その希望どおり明治三十八年四月十三日、五十八歳で没するや、光念寺に墓が設けられた。

父子の墓は高さ二メートルほどの塚で、松が二本植えられ、てっぺんに「南無阿弥陀仏」と刻んだ墓標が置かれた。ところが戦後、鳥尾家からの連絡も途絶え、昭和四十年代に塚は崩され、墓標は無縁仏の中に移された。現在も光念寺には小弥太の位牌や肖像画（本書口絵参照）、「南無阿弥陀仏」と書いた遺墨が残されている。播州平野の一角と、一人の元勲との接点は薄れかける記憶で語り継がれているのだ。

【メモ】 光念寺は加古川市加古川町寺家町、JR山陽本線加古川駅から徒歩十分。

30 中部幾次郎の故郷

神戸市の西隣の明石市は明石海峡を望み、日本標準時の子午線しごせんが通る。江戸時代は徳川親藩の明石藩松平家（八万石）の城下町で、幕末には長州藩と敵対関係にあった。

特に慶応二年（一八六六）の第二次幕長戦争には、明石藩は幕府の求めにより軍勢を送り、長州軍と干戈を交えている。

くしくもその年、下関の大洋漁業の生みの親中部幾次郎が、中部兼松の次男として現在の明石市東魚町に誕生。父は生魚運搬業の林兼商店を営んでいた。屋号は中部家が出た明石の林崎村と、兼松の名に由来する。

兄が早世したため、幾次郎は早くから父の仕事を手伝った。

二十歳のころには父の命で四国や九州まで魚の買い付けに行き、大阪の魚市場に運び、商売の知識を得た。

高く買い、安く売るのがモットーで、早くから世人の信頼も厚かったという。

明治三十年ごろは、明石沖などでサバやサワラの豊漁が続いた。これを大阪まで運ぶと時間がかかり痛むため、明石の魚問屋では焼いたり、塩にして送っていた。

そこで幾次郎は百トンの小汽船を曳船に使い、生魚運搬の時間短縮に成功。鮮魚は大阪で高値で売れ、巨利を得ることになった。

また幾次郎は、当時アメリカ製しかなかった発動機に着目。明治三十九年には日本初の発動機船（十二



明石公園に建つ中部幾次郎銅像

トン、八馬力)第一新生丸を造り、これを使って明石から下関を回り、日本海へと乗り出し、舞鶴のブリや小浜おぼまのカレイを買い付けた。さらにはこの船で、朝鮮半島の漁場にも進出する。

以後の幾次郎の活躍は、まさに東奔西走だ。

発動機開発に没頭し、下関彦島に林兼造船所を設立して製造にかかる。あるいは青森に大東缶詰会社を設立し、北日本の魚を加工して海外輸出した。

さらに捕鯨ほげいにも進出し、昭和十一年(一九三六)には大洋捕鯨会社を興した。日本一の捕鯨船日新丸で、世界の海に林兼が乗り出したのである。

幾次郎は事業の都合で本拠を下関に置いたが、故郷明石のことは忘れたことがなかった。

長い間、住所は明石に置き、多額の納税をし、幾多の公共事業に寄付を惜しまなかった。

特に大正十一年(一九二二)に明石中学校(現在の明石高校)建設の際は、十五万円もの寄付を申し出ている。

明石市では幾次郎の徳をたたえ、昭和三年(一九二八)、城跡の明石公園(兵庫県明石市明石公園)入り口に、銅像を建立。和服姿で杖を片手に佇む姿である。

幾次郎が亡くなったのは昭和二十一年。八十一歳だった。

【メモ】明石公園はJR山陽本線明石駅下車すぐ。

31 マッチ王・滝川弁三

「士族の商法」と言われるように、武士は商売には不向きとされた。

しかし明治日本で、武士から実業家に転身し、成功した例がある。生涯、五百もの会社に関係した渋沢栄一などはその代表格。山口県出身では、滝川弁三がいる。

彼らは武士道を商売の基本とする「士魂商才」を実践した。

滝川弁三は長府藩の出身だ。長府藩は毛利秀元を藩祖とする長州支藩のひとつで、現在の山口県下関市を中心に五万石を領していた。

弁三は幕末、乃木希典のぎまねずけとともに集童場に学び、報国隊に参加し、戊辰戦争では東北各地を転戦する。

維新後の日本には西洋の文明品が続々と入り、ひどい輸入超過となる。これに対抗するため、日本にはひとつでも多くの輸出品が必要だった。

こうした状況を見た弁三は明治十三年（一八八〇）六月、井上清七らと共同で、神戸市に清燧社を設立。清国上海への輸出用マッチ製造に乗り出す。

その頃、良港をひかえた神戸には、十数人のマッチ製造業者がいた。

だが、業者の過当競争は品質を低下させ、日本製マッチの信用はガタ落ちとなる。明治十四年には二十五万円近くあった輸出額が、十五年には三万七千円、十六、七年には三千元前後にまで落ち込んだ。

厳しい試練の中、弁三はひとまず輸出向けを国内向けに切り替える。そして、薬品を精選するなど研究を重ね、品質を向上させたから、明治十八年には上海市場への輸出が再開された。



滝川弁三胸像と現在の滝川学園

さらに弁三は、マツチのデザインにも凝る。中でも「桃印」と「花藍童子」は大ヒットし、上海や広東、仏領インドシナ（ベトナム）の市場を独占した。海外で大量のニセ「桃印」が出現したが、これがかえって弁三の評価を高めたというから、複雑な心境だったろう。

大正五年（一九一六）、東洋マツチ株式会社と改名し、全国生産高の五分の一を占めた。

「マツチ王」と冠された弁三だが、

「マツチはもうからんぞ。でもおれは国家的事業だと思ってやったのだ」

と、周囲にその志を語ったという。

隠居した弁三は教育事業に力を注ぐ。巨額の私費を投じ、大正七年一月には私立兵庫中学校を創設。同校は翌八年八月、兵庫県滝川中学校と改称し、戦後は学校法人滝川学園（中学・高校）となり現在に至る。甲子園でおなじみの滝川高校だ。

創立精神として、至誠一貫・質実剛健・雄大寛厚を掲げたのが、弁三らしい。大正十四年一月十二日、

神戸市生田町の自宅で七十五歳で没。

その後、マツチは斜陽化したのが、三周忌に滝川中学校の職員、生徒および卒業生一同が弁三をしのび建立した胸像が、いまも神戸市須磨区宝田町二一一一の滝川学園に残る。

【メモ】滝川学園は地下鉄板宿駅下車徒歩十分。

32 伊藤博文と禅昌寺

神戸市須磨区禅昌寺通一丁目の禅昌寺（臨濟宗）はカエデの老木が多く、紅葉の名所として知られる。かつてはシーズンになると境内に赤毛せんを敷いた茶屋が出、風流人たちで賑わった。瓢水作の「本尊は釈迦か阿弥陀かもみじかな」の一句が、その光景をしのばせる。

山陽電鉄か市営地下鉄の板宿駅で下車し、住宅街の中を妙法寺川沿いに十数分上ると、禅昌寺の入り口に至る。

左甚五郎作と伝えられる山門に続く坂を上り切ると、右手に高さ約七十センチの、ささやかな自然石の碑が立つ。彫りも浅く、消えかかった文字は大変読み難いが、実は伊藤博文の詩碑である。

「問道老僧移錫処 延文遺跡尚存留 満山紅葉無人稀 風色蕭々古寺秋

禅昌寺観楓 博文」

意味はこうであろう。

「月庵禅師（禅昌寺創建者）が錫杖しゃくじょうを移したこの遺跡は、今なお趣を残す。満山紅葉し、人の姿を見るのも稀だ。風光もの寂しげな古寺の秋である」

伊藤が紅葉の禅昌寺を訪れた際の作だ。伝えられるところによるとこの時、伊藤は板宿の大庄屋武貞家の法事に招かれたという。石碑も昭和二十六年（一九五二）、「武貞一族大法要」のため建てられたことが、裏面に刻まれている。

禅昌寺に尋ねてみたが、伊藤来訪の年月日は、いまとなつては不明だそうだ。ただ、禅昌寺には伊藤が



禅昌寺に建てられた伊藤博文詩碑

別の漢詩を記した掛け軸が伝わっており、その箱には明治二十六年（一八九三）十一月二十六日と記されているから、あるいはそれが訪問の日なのかも知れない。

だとすれば伊藤は五十三歳で、第二次伊藤内閣を率いていた頃だ。陸奥宗光外務大臣が、幕末に欧米列強との間に結ばれた不平等条約改正のため、東奔西走した時期でもある。内閣総辞職・衆議院解散を唱える民党との戦いも激化した。

そんな中、伊藤は何を思い、禅昌寺での時を過ごしたのか。

明治元年より初代兵庫県知事を一年ほど務めた伊藤にとり、神戸は第二の故郷ともいうべき地だ。時折、骨休めに帰って来ていた。

市民の間でも、外国貿易の振興に尽くした伊藤の人氣は高かった。知事時代、散髪して四六に分け、チヨウネクタイに洋服を着込んだ伊藤は、「坊主奉行」と呼ばれ親しまれていたという。禅昌寺の石碑も、そんな伊藤人氣の産物であろう。

先日、神戸市兵庫区の関西電力変電所の塀に、小中学生が描いた地元の歴史画を見た。その中に平清盛らと共に伊藤の姿もあり、人氣の存続を確認した気がした。

【メモ】伊藤が知事として勤務した明治元年当時の兵庫県庁は、現在の神戸市兵庫区中之島あたりにあった。跡地近くのキャナル・promナードと呼ばれる新川運河沿いの遊歩道内には「兵庫城跡・最初の兵庫県庁の地」と刻む石碑がある。地下鉄海岸線中央市場前駅下車。

33 井上勝と逢坂山トンネル

萩城下出身の井上勝^{まさむね}は幕末の文久三年（一八六三）年五月、長州藩がイギリスロンドンに送り込んだ五人の秘密留学生のひとりである。当時は野村弥吉と称していた。

井上の帰国は明治元年（一八六八）十一月のこと。すでに幕府は倒れ、新政府がスタートしていた。明治日本は近代化を進め、一刻も早く欧米に追いつこうと懸命だった。そのためになつたのが、鉄道だ。政府は明治二年冬、鉄道建設の議を決め、翌三年春より東京・横浜間の敷設工事を開始する。

実は井上がイギリスで学んだのは、鉄道と鉱山だった。そこで政府は当初から井上を事業に関与させ、明治四年八月には鉄道頭に就け、工事を指揮監督させた。

こうして翌五年五月、早くも新橋・横浜間の鉄道が竣工し、仮運転が始まる。

井上は近代化のためには、鉄道が最大急務であるとの信念を持っていた。ところが当時、井上の他に鉄道についての豊かな知識を持つ日本人はほとんどおらず、お雇い外国人が主導していた。

国家の動脈である鉄道が、いつまでも外国人任せではよくないと井上は憂いた。そこで、大阪で鉄道技術の見習生養成を始める。教育には飯田俊徳^{としのぶ}と建築師長シャートンがあたり、井上も講義することがあったという。

飯田も長州藩出身で、幕末には吉田松陰に師事し、奇兵隊に参加して、さらにはオランダに秘密留学した経歴を持つ。

続く関西の鉄道敷設も、最初は外国人任せだった。しかし井上は、時期尚早という反対を押し切り、明



鉄道記念物の逢坂山トンネル東口

治十一年に着工した京都・大津間の工事を、自ら育てた日本人技師たちの手だけで行う。

この区間は、難所として知られた逢坂山にトンネルを掘らねばならない。明治十一年十月に東口から、十二月に西口から掘削が始められ、ついに十三年六月二十八日、全長六六五メートルを竣工させた。

井上が維新からわずか十余年で、日本人だけの手で鉄道が造れることを、証明した意義は大きい。欧米に対し、コンプレックスを抱いていた当時の日本人に、どれ程の自信と独立意識を持たせたか測り知れないのだ。

以後も井上は鉄道のために尽力し、「鉄道の父」と呼ばれた。そして鉄道視察中のロンドンで倒れ、明治四十三年八月二日、客死する。六十八歳だった。

この逢坂山トンネルは、大正十年（一九二一）八月に東海道線の路線変更があるまで、使用された。現在も滋賀県大津市逢坂一丁目の国道一六一号傍らに苔むした上下二本のトンネル東口の遺構が残り、京都大学の地震予知観測所になっている（鉄道記念物）。入り口の完成を祝う石額は当時のままで、三条実美書で「楽成頼功」とある。落の字では縁起が悪いので、わざと楽にしたのだという。

【メモ】逢坂山トンネル東口遺構はJR大津駅より徒歩十分。

西口遺構は名神高速道建設のため地下十八メートルに埋没したが、大津市大谷町の道端に昭和三十七年、「旧東海道線 逢坂山とんねる跡」の石碑が建てられた。また西口にあった井上勝撰文の竣工記念碑は現在、大阪交通科学館（大阪市港区波除三二二一〇、JR大阪環状線弁天町駅下車）に移されている。

34 宮廷建築家・片山東熊

幕府が倒れ、明治という新時代がスタートするや、政府は洋風の文明開化を促進。その反面、日本古来の伝統文化が軽視され、廃仏毀釈はいぶつきしやくの横行もあって、多数の社寺の文化財が損傷、散逸するという弊害も起った。

奈良興福寺の五重塔が払い下げられたのも、この頃の話だ。購入者は焼き払って金具を取ろうとしたが、類焼を恐れる声が強く、中止されたという。

見かねた政府は明治四年（一八七一）、文部省博物館を設け、古器旧物保存のため動き出す。

さらに明治二十二年、東京と古社寺と文化財の集中地区である奈良・京都に、それぞれ宮内省管轄の帝國博物館（戦後は国立博物館）を設立することが決まる。

そして、奈良・京都両博物館の主任技師として設計、工事を担当することになったのが片山東熊とうぐまであった。

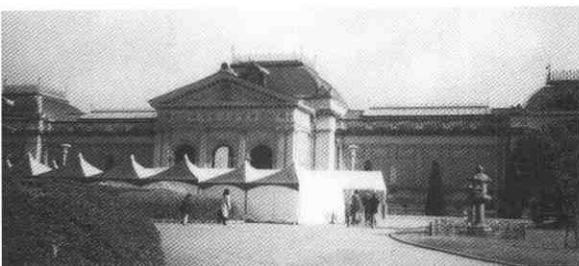
東熊は萩松本村の人である。長州藩士の家に生まれ、慶応三年（一八六七）八月には奇兵隊に入った。入隊資格は十五歳からで、東熊は十四歳だったが、体格がずば抜けて立派だったので、採用されたと言われる。

戊辰戦争に従軍した東熊は維新後、大阪に出て造兵寮に入り、軍人を目指した。

しかし、なぜか「志」を転じ、横浜の外国人宅で書生として働きながら、英語を学ぶようになる。さらには明治六年、工学寮官費生となり、西洋建築を学び、十二年、工学大学校（現在の東京大学工学部）造



奈良国立博物館



京都国立博物館

家学科の第一回生として卒業した。

明治十九年には宮内省の内匠寮に出仕した東熊は、以後、「宮廷建築家」の第一人者として活躍し、明治日本に西洋建築を次々と生んでゆく。また二度にわたりヨーロッパに留学し、明治二十一年には内匠寮技師、東京工科大学造家講師を任され、二十四年には工学博士の学位を授かった。

奈良博物館は明治二十七年十二月に、京都博物館は翌二十八年十月に竣工した。いずれもヨーロッパの宮殿を思わせる、パロック様式、レンガ造りの華麗な建物で、周囲の景観ともよくマッチしている。現在は重要文化財に指定されているが、どちらの建物も一世紀を経てなお、現役の博物館として使われている。奈良国立博物館の地下回廊壁面には近年、東熊の写真パネルがお目見えした。

他に東熊の代表作としては、東京の赤坂離宮がある。明治四十二年、皇太子（後の大正天皇）のため建てられたこの宮殿は、昭和四十九年より迎賓館（げいひんかん）として利用され、数々の国際交流の舞台となっている。

東熊が、東京千駄ヶ谷（ちだがや）の自宅で没したのは大正六年（一九一七）十月二十三日のこと。六十三歳であった。

【メモ】奈良国立博物館（奈良県奈良市登大路五〇）は近鉄奈良駅から徒歩十五分。京都国立博物館（京都府京都市東山区茶屋町五二七）はＪＲ京都駅からバス博物館・三十三間堂前下車。

35 新選組に入った長州人

京都の中心地から西寄りの壬生界隈が、特に今年（平成十六年）は多くの観光客で賑わっている。言うまでもなく、NHK大河ドラマ化された、新選組の本拠地だからだ。

文久三年（一八六三）、幕府が募集した浪士組が、方針の違いをめぐって分裂。

多摩の農民出身だった近藤勇・土方歳三、それに芹沢鴨ら十数人が京都守護職会津藩の預かりとなり、壬生で新選組を結成する。

以後、明治二年（一八六九）五月、北海道箱館（函館）で土方が戦死するまでの、六年におよぶ新選組の歴史は、「滅びの美学」好きの日本人の間で好まれ、繰り返し映画・演劇や、テレビドラマ・小説の題材として取り上げられて来た。

幕府方の機動隊ともいふべき新選組の「敵役」は、桂小五郎・久坂玄瑞ら長州藩士である。その対立が根深いものだったのは確かだが、実は誕生間もない新選組に入った、長州脱藩の浪士がいた。

その名は佐伯亦三郎。

新選組に加盟した佐伯は、長州藩京都屋敷に巧みに出入りして内情を探索したという。

しかし、久坂らに捕えられ、文久三年八月十日、千本北野原で斬られた。享年不詳。当然その名は、長州側の殉難者名簿には記録されていない。

幕末の長州藩は「攘夷」を旗印にかかげ、武士だけでなく、庶民も戦いに巻き込む。幕府や欧米列強と敵対し、ついには京都に攻め込んで、「朝敵」の汚名を受けた。自他共に認める「狂気」をもって暴走した



新選組が結成された壬生の八木邸

のだ。

数年後、長州藩は幕府を倒して維新の「勝者」となり、一方の新選組は「敗者」となった。佐伯も長州藩に居続けければ、出世の道が開けたかも知れないというのは、結果論に過ぎない。

長州藩の場合、「挙藩一致」と言えば格好が良いが、大半の者たちは過激なやり方の指導者たちに、肝を冷やしたに違いない。堪えきれず、亡命した者もいただろう。佐伯もそんな一人だったと想像すれば興味深い。

体制側の新選組に身を寄せた佐伯の判断は、文久三年時点では常識的だったと思う。まして権威主義、保守的とされる長州人気質を考えるなら、なおさらだ。

大河ドラマに佐伯が登場すると聞き、楽しみにしていたら、設定は長州脱藩ではなく、しかも、酔った芹沢に斬られるという呆気ない最期を遂げた。

はからずもドロップアウトした佐伯に光を当てることで、一抹の歴史の真実が描かれるのではと期待しただけに、ちよつと残念であつた。

【メモ】壬生界限（京都市中京区）は阪急京都線大宮駅下車。

36 敵の「志」を認めた男

幕末に繰り返された政争劇を、講談や小説では「勤王」対「佐幕」として図式化する。そうしないと物語が複雑になり、面白味を欠くからだろう。

ところが実際は、そんな単純に、敵味方が色分け出来たわけではない。

勤王の松下村塾生や奇兵隊士が目指したのは、朝廷を尊び、外国を打ち払う「尊王攘夷」だが、佐幕の新選組局長近藤勇が目指したのも「尊王攘夷」だった。

長州側は場合によっては幕府を否定し、「尊王攘夷」の実現を夢見る。

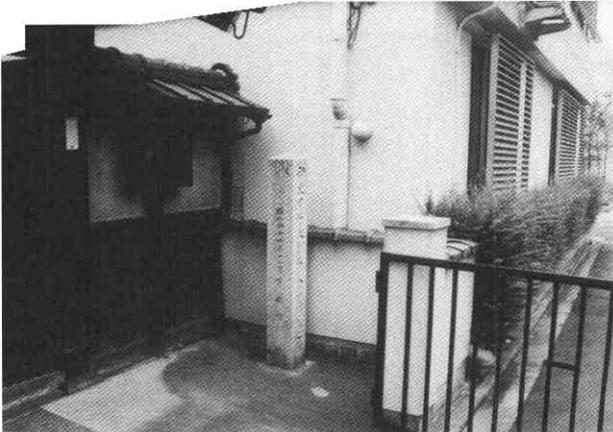
一方、近藤はあくまで幕府の手で「尊王攘夷」の実現を願った。

つまり、幕府という政権の是非をめぐる対立で、根底に流れるイデオロギーは、きわめて近いものがあったのだ。明治になり、ある長州系の元勳は、新選組の史料を見、同じような考えを持ちながら戦っていたのを知り、驚いたという。

慶応三年（一八六七）三月、十余名の賛同者と共に新選組から分離した幹部の伊東甲子太郎なども、こうした複雑な時代を象徴する人物だ。

伊東は常陸（現在の茨城県）出身で、北辰一刀流の達人。江戸で剣術道場を主宰したが、近藤に誘われ、元治元年（一八六四）十一月、新選組に参加し参謀になった。

伊東は近藤らと共に、慶応元年十一月と翌二年一月の二度、幕府の長州詰問使に従い、西国に下っている。長州藩入りは拒まれたが、伊東は沸騰する討幕の気運を察す。そして時局收拾のため、長州救済を尾張



伊東甲子太郎が暗殺された油小路の本光寺

藩前藩主徳川慶勝よしかつに建白した。

これにより、長州藩を厳刑に処せと主張する近藤らとの間に、溝が生じる。その結果、慶応三年十一月十八日、近藤の饗応に応じた帰途、油小路木津屋橋通（現在の京都市下京区油小路通り）で新選組に暗殺された。享年三十二。

さらに、変を聞き駆けつけた藤堂平助ら伊東の同志三人も、斬り殺される。

油小路に面した本光寺には、伊東がもたれかかり絶命した石塔が残り、門前には「伊東甲子太郎外数名殉難之跡」の碑がある。伊東らの墓は、京都市東山区泉涌寺の塔頭戒光寺たいくわうに現存する。

新選組の参謀時代、伊東は「長門の国桜山はみな国の為め討死せし人々の魂をまつれる処なれば」と題し、

「日のもとにほひも高きさくら山ぬるゝもうれし花のしたつゆ」

と詠んだ。下関桜山の招魂場（現在の桜山神社）に祭られた奇兵隊戦死者の霊に捧げた歌である。

敵の「志」を認めるのは、日本古来の美德だ。

それが失われた時、戦いは泥沼化し、暴走、迷走のすえに、お互い壊滅する道しかないのである。

【メモ】本光寺はJR京都駅下車。泉涌寺戒光寺はバス泉涌寺道下車。

37 松陰「山河襟帯の詩」

二十四歳の吉田松陰は、嘉永六年（一八五三）六月、相模国浦賀に來航したアメリカの黒船艦隊を目撃した。

アメリカのペリー提督は、高圧的な態度で開国を迫る。狼狽する幕府に失望した松陰は、「自分がなんとかせねば！」との意を強く抱く。

「己を治め、彼を知り、變に応ず」が、兵学者でもあつた松陰の持論だ。そこで、ロシアの黒船が長崎に來航していると知り、外国の文明を視察するため、密航を決意。九月に江戸を発ち、長崎へと向かった。途中、京都に立ち寄つた松陰は勤王派の詩人梁川星巖やながわせいがんを訪れ、孝明天皇が時世を憂っていると聞かされる。

江戸時代、幕府により天皇は、つねに政治的な問題から遠ざけられて来た。だから、日本の行く末を案じる天皇というのは、松陰にとり新鮮な驚きだつたようだ。

十月二日（一日とも）、感動覚めやらぬ松陰は、皇居を拝し、有名な「山河襟帯の詩」と呼ばれる長い漢詩を作つた。

この詩で松陰は、国難に直面した日本が、天皇を奉じて攘夷を実行し、国を護り、平和を取り戻さねばならぬと訴える。そして、せっかく不世出の天皇がいても、悠々として機会を逸している公卿たちを批判する。

「山河襟帯の詩」は「松陰にとつては時局に憤を發して遂に天朝を思ふに到つた思想過程を記念するもの」

(玖村敏雄『吉田松陰』)と評される、重要な作になった。

それから長崎まで行った松陰だが、すでにロシア艦は去っていた。

あきらめて江戸に戻った松陰は、翌安政元年(一八六四)三月二十七日、下田港からアメリカ密航を企てるが失敗し、故郷萩に送り返されることとなる。

黒船来航で受けた衝撃と、憂う天皇を知った感激とが、松陰を突き動かす。

以後、萩で松下村塾しやまのむらまはを主宰し、幕府の外交政策を激しく批判し、「安政の大獄」で処刑されたのは、周知のとおりだ。

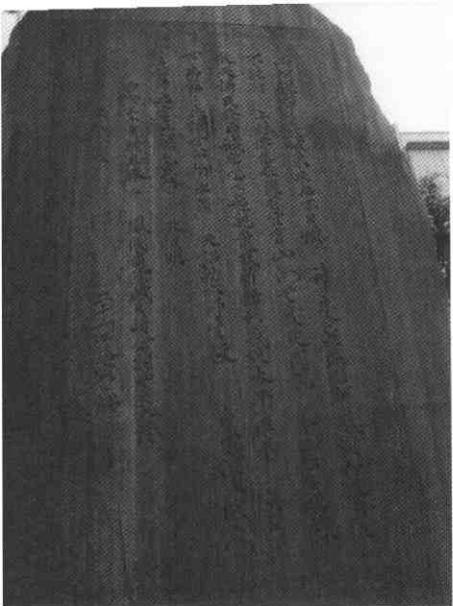
時は流れて明治四十一年(一九〇八)十月。

松陰の没後五十年を記念し、京都市左京区岡崎公園内の府立図書館前に、「山河襟帯の詩」を自筆のまま刻む巨大な碑が、京都府教育会などの尽力で建てられた。裏面には門下生の野村靖が、その由来を記している。

松陰は自分が死んだら、その「志」を託した著作を保存して欲しいと、遺言した。それが最も供養になるとも言った。

松陰が大きな転機を迎えた京都に、この碑が現存する意味は、決して小さくはないだろう。

【メモ】京都府立図書館はJ R京都駅や阪急電車四条烏丸駅からバス京都美術館前下車。梁川星巖邸跡は京都市左京区聖護院蓮華蔵町で、現在は石碑を見るのみ。



京都府立図書館前の「山河襟帯の詩」碑

38 伏見の乃木神社

長府藩出身の乃木希典^{のぎまねすけ}が、妻静子と東京赤坂の自宅で明治天皇に殉じて自決するという衝撃的な最期を遂げたのは、大正元年（一九一二年）九月十三日のことだ。

京阪電車の取締役だった村野山人（薩摩出身）は、乃木の一周忌に会社を辞めた。そして大正五年（一九一六）、全財産を投じて現在の京都市伏見区桃山町に乃木神社を創建する。JR奈良線桃山駅から徒歩で十分ほどの地だ。

没後、「軍神」となった乃木を祭る乃木神社は、他にもゆかりの地である栃木県那須、北海道函館、山口県長府、東京赤坂、香川県善通寺に誕生した。その数は、他の同時代人を祭る神社に比べても、格段に多い。

例えば東郷平八郎を祭る東郷神社、児玉源太郎を祭る児玉神社はそれぞれ二カ所であることを思うと、「乃木人気」の高さがうかがえる。

伏見に乃木神社が創建されたのは、近くに明治天皇陵が造営されたからだ。

天皇と乃木の間には、あつい信頼の絆があった。

質実剛健をモットーにした天皇にとり、古武士のような乃木は愛すべき存在だったのだろう。天皇は自分の孫の教育を、乃木に任せただけである。

伏見の乃木神社で見るべき第一は、中国柳樹房より移された平屋建ての民家であろう。

村野が満州まで赴き、所有者である周玉徳より買い上げた乃木ゆかりの建物だ。



中国柳樹房より移された乃木ゆかりの建物

日露戦争の際、旅順攻略を使命とする第三軍司令官となった乃木は、遼東半島に上陸し、この住宅を借り受け、司令部兼宿舎としたのだ。

両端を石積の壁で挟み、中央は漆喰壁という、簡素なこの建物の中で、大国ロシアを相手に戦う乃木は、何を思い、考えながら、起居したのだろうか。

一世紀の時を越え、乃木と同じ空間を共有しているかと思うと、感慨深いものがある。

境内には宝物殿もあり、乃木夫妻の木像や遺墨、単眼鏡や入れ歯といった遺品が展示されている。

伏見はまた、若き日の乃木の思い出を秘めた地でもあった。

明治二年（一八六九）十一月、藩命を受けてフランス式演習を習得する

ため、伏見御親兵兵營で学んだことがあるのだ。ただし乃木本人は乗り気

ではなかったようで、一年ほどで希望して長府に帰ってしまった。

39 山県有朋と無鄰菴

長州萩の下級武士から身を起こした山県有朋は幕末、奇兵隊に参加して、外国や幕府を相手に奮戦した。明治新政府に入って徴兵制を施行するなど陸軍建設で活躍し、陸軍大将、元帥となる。また、二度にわたり内閣を組閣し、公爵に列せられ、大正十一年（一九二二）二月一日に八十五歳で没するまで、政界・軍部双方で絶大な権力をふるった。

山県は太閤記をしのぐ程のサクセス・ストーリーの持ち主でありながら、陰謀好きの性格や、軍国主義の権化のようなイメージからか、存命中から国民には人気がなかったという。

そんな山県の趣味は庭造りで、各地に広大な別邸を幾つも持っていた。京都洛東の南禅寺に近い無鄰菴むりんあん（京都市左京区岡崎）も、そのひとつである。

明治二十七年（一八九四）、造営に取りかかり、同二十九年に完成。

大半を占める庭園の面積は三千百三十五平方メートルで、山県の設計・監督により、造園家小川治兵衛が作庭した。東山を借景として疎水を引き入れた、池泉廻遊式庭園である。

建物は、木造の母屋や茶室の他に、明治三十一年にレンガ造り二階建の洋館が建てられた。

洋館の二階には、江戸時代初期の豪華な花鳥図障壁画で飾られた、和洋折衷の部屋がある。ここに明治三十六年四月二十一日、山県・伊藤博文・桂太郎・小村寿太郎が集まり、いわゆる「無鄰菴会議」を開いた。日露開戦が迫ったため、対露方針四力条を決めた重要な会議だ。

無鄰菴は昭和十六年（一九四一）に京都市に寄贈され、同二十六年には国の名勝に指定された。さらに



無鄰菴會議が開かれた洋館

平成四年からは、一般公開されている。会議の行われた部屋は、障壁画や格天井、椅子、テーブルまで当時のまま保存されており、重厚な雰囲気漂う。

「無鄰菴」の名は、山県が奇兵隊時代に住んだ、長州吉田村（現在の下関市）の小さな住居の号を、引き継いだものだ。

山県にとつては、青春の懐かしい思い出だろう。しかし、隣が無いというのは、孤独な権力者だった山県の生涯をも象徴しているようである。

なお、京都には山県の無鄰菴がもうひとつあった。現在の京都市中京区木屋町二条下ル東生州町四八四

一六の角倉了以別邸を、山県が買い上げたものだ。

角倉は高瀬川開削で知られる江戸初期の豪商。こちらは今日、日本料理屋（がんこ高瀬川二条苑）になっていて、玄関前に「山県有朋第二無鄰菴」と刻む石碑が建てられている。

【メモ】無鄰菴はJR京都駅からバス南禅寺・永観堂下車。第二無隣庵は地下鉄京都市役所前駅または京阪電鉄京阪三条駅下車。

なお幕末の一時期、吉田松陰の伯父（松陰実母タキの兄）である竹院和尚が南禅寺住職を務めたことがある。

40 長州藩京都屋敷

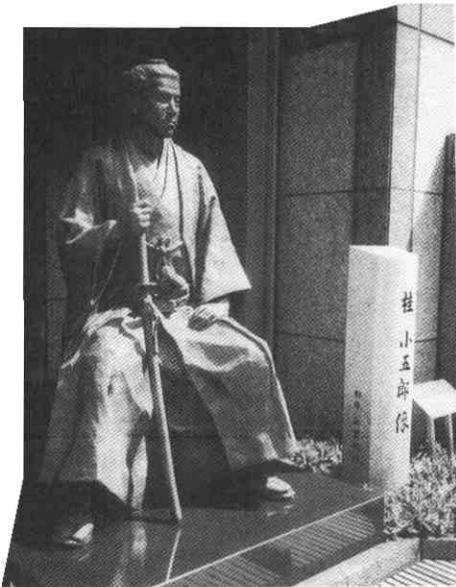
幕末になり、頻発する内外の諸問題に対応しきれなくなった幕府は、それまで蚊帳の外だった外様大名にも、発言を許した。これを念願の中央進出のチャンス到来であると見た長州藩は、文久二年（一八六二）七月、藩論を公武合体から尊王攘夷に転換。藩主父子は七百の兵を率いて京都に乗り込み、朝廷と結び付いて、幕府に対して攘夷断行を迫った。

追い詰められた將軍家茂は上洛し、文久三年三月には加茂行幸に随従させられる。さらには、五月十日をもって攘夷を断行すると、孝明天皇の前で約束させられる羽目に陥った。すでに欧米列強との間に、通商条約を締結しているにもかかわらずである。

こうした急進的な政治活動の拠点になったのが、河原町にあった長州藩の京都屋敷だ。現在の京都市中京区河原通り御池上ル東側、京都ホテルオークラの場所である。

この土地は、元和五年（一六一九）に大文字屋与左衛門が長州藩主毛利家に献上したものだ。毛利家は謝礼として、大文字屋に銀二千二百枚を贈った。のち、寛永八年（一六三一）に拡張して四千三百坪余りになったが、それでも幕末になると手狭になり、付近の寺院を借り上げて藩士たちの宿舎とした。

ホテルオークラの河原町通りに面した一角には、桂小五郎（木戸孝允）の銅像がある。羽織り袴姿で鬚を結び、右手に太刀を持ち座る、有名な写真（本書口絵参照）を元にした作品だ。平成七年三月、京都桂ライオンズクラブの建立で、作者は江里敏明氏。ちなみに江里氏は桂銅像が機縁となり、平成十六年十一月、萩城跡に竣工した毛利輝元銅像も制作している。



京都屋敷跡の一角に建てられた
桂小五郎銅像

桂は長州藩士で、萩城下出身だ。江戸で剣術を修行し、京都での周旋では先頭に立って働いた。

文久三年当時は、三十一歳。花街にくり出し、芸者を侍らせては他藩士らと盃を交わし、謀議を進めた。小説や時代劇で知られる芸妓幾松とのロマンスも、この頃の話だ。

しかし長州藩はこの年八月十八日に起こった政変で失脚し、京都での地位を失う。

翌元治元年（一八六四）七月、失地回復を求めて御所に攻め込み、「禁門の変」を起こすも敗走。留守居役の乃美織江らは、京都屋敷に火を放ち退却した。桂も京都を脱出し、現在の兵庫県北部に潜伏する。

その後、跡地は幕府に没収されたが、復権を果たした長州藩は明治元年（一八六八）七月、再びこれを購入。廃藩置県前の明治四年二月になって売却した。

【メモ】長州藩京都屋敷跡の京都ホテルオークラは地下鉄京都市役所前駅下車。

長州藩が幕末に藩士の宿舎として借り上げた藩邸付近の寺に、法雲寺と妙満寺がある。法雲寺は中京区河原町通り二条上ル、清水町に当時の姿の姿の本堂が残る。ここは家老浦鞆負の宿舎で、文久二年七月から九月まで、長井雅楽要撃に失敗した久坂玄瑞が謹慎させられたこともある。妙満寺は中京区寺町通り下ル東側にあつたが、昭和四十二年に洛北の岩倉幡枝町に移転した。京都周旋に異を唱え、文久三年三月に剃髪した高杉晋作が一時住んだ寺である。跡地の駐車場には「間部詮勝寓居跡」の碑があるが、これは安政の大獄の際、幕府の老中間部が妙満寺を宿舎としたためだ。この間部の暗殺を企み処刑されたのが、晋作の師吉田松陰だったことを思うと、さらに興味深い。

41 池田屋事変と吉田稔麿

明治維新を一年遅らせたと言われる「池田屋事変」は、元治元年（一八六四）六月五日に起こった。

この夜、京都三条小橋の旅宿池田屋で、長州系の尊攘派が密談のため集まっていた。彼らは前年八月十八日の政変で失脚した長州藩の復権策を、練っていたのだ。

一説によると、京都じゅうに放火し、混乱に乗じて天皇を長州に連れ去るという過激な計画まで立てていたという。

それを察知した近藤勇いさか率いる新選組は池田屋を襲撃し、多数の死傷者、逮捕者が出た。前年、市中警備を目的に生まれた新選組は、京都守護職の支配下にあったのだ。

事件により尊攘派側は長州の吉田稔麿・杉山松介・広岡浪秀、肥後の宮部鼎蔵・松田重助、土佐の望月亀弥太・北添倍磨・石川潤次郎が斬られたり、自害して果てた。

この知らせがもたらされるや、長州藩は絶望のどん底に叩き落とされる。長州藩はそれまで、嘆願による平和的手段での復権にも一縷の望みを抱き続けていたからだ。

特に吉田稔麿は、幕府方にも知己がいたので、パイプ役として期待をかけられていた。

吉田は萩の下級武士出身で、吉田松陰門下の秀才として知られた。享年二十四。

「池田屋事変」は、長州藩に対する幕府方の徹底した強硬態度の表明だった。

もはや武力に訴えるしかない——長州藩の絶望は、同年七月十九日の「禁門の変」へと発展する。

池田屋跡（京都市中京区中島町）は現在、パチンコ屋になり、「維新史蹟 池田屋騒動之址」と刻む小さ

な石碑を見るのみだ。前の通りも幕末に比べると、二倍以上に拡張されているとのこと、当時を偲ぶすべはない。

吉田らの遺骸は幕府役人の手で、近くの三縁寺に山積みにされた。そして、彼らが出入りした料亭の女主人小川川に、遺骸の名を確認させた上で埋葬された。

時は流れて昭和五十四年（一九七九）四月。

三縁寺が郊外の京都市左京区岩倉花園町に移転する際、吉田らの墓を掘ったところ、記録を上回る十五もの頭蓋骨が見つかった。

いきなり襲撃して斬り捨てるといふ新選組の過激なやり方には、当時から幕府内部でも非難の声が強かった。長州藩も京都守護職に抗議している。そのため、死者数を少な目に発表したのだろうという説が生まれた。

いまでも三縁寺の一角には、事件犠牲者の墓碑数基が並ぶ。

長州の吉田・杉山・広岡は、土佐の三名と合葬されている。

墓碑は昭和八年（一九三三）の七十回忌の建立で、碑銘を揮毫したのは、山口県出身の歴史家村田峰次郎（清風の孫）だ。

【メモ】池田屋跡は京阪電鉄京阪三条駅下車。三縁寺は地下鉄烏丸線北大路駅よりバス花園町下車。

三縁寺に建つ吉田稔麿らの墓



42 香川助三暗殺事件

長州藩士香川助三が京都日ノ岡で暗殺されたのは、文久三年（一八六三）一月二十一日のことである。享年二十二。

さらに同年三月七日、京都河原町の長州藩邸で、香川を暗殺した四人の藩士が、切腹し果てた。彼らの名は松浦富三郎・中谷彪次郎・勝木又三郎・榎崎仲輔。いずれも二十一、二歳の若者だ。

京都にいた品川弥二郎は四人の切腹につき、

「孰れも見事なる事にござ候」

と、萩の父親に手紙で知らせている。

当時、朝廷の権威を楯にした長州藩は、幕府に攘夷断行を迫っていた。そんな絶頂期に起きた血なまぐさい事件だった。

『防長維新関係者要覧』（昭和四十四年）によれば、殺された香川も、殺した四人も、階級は「八組士」である。

長州藩の八組士は、馬廻り役とも大組士とも呼ばれ、藩主一門、永代家老、寄組に次ぐ階級。一千六百石から四十石までの約一千二百軒があり、藩主の側近もこの中から選出された。そんな長州藩の「プリンス」が、一度に五人も死んでしまったのだ。当時としては衝撃的な事件だったはずである。

ところが、長州藩の維新正史『防長回天史』全十二冊（大正十年）には、香川の暗殺も、四人の切腹も、まったく記述がない。これは不自然なことである。



霊山に並ぶ松浦・中谷・勝木・榎崎の墓

この時から約一年前、伏見で「寺田屋事変」が起こった。諸国から集まった尊攘派の過激分子が、京都で挙兵を計画するも、薩摩藩に鎮圧されたのだ。「防長回天史」を見ると、長州藩からこの計画に参加した者の中に、中谷・榎崎とともに香川もいたことが分かる。

つまり殺した側も、殺された側も、同じ尊攘派の同志だったのだ。こうなると香川暗殺事件は、尊攘派内部での「内ゲバ」である可能性が高い。

香川を暗殺した四人の墓は、京都市東山区清閑寺町の霊山（京都護国神社）に並ぶ。『霊山祭神の研究・長州藩』（平成元年）によれば、四人は「私祭」されているのだという。さらに同書には、殺された香川は「佐幕派の長州藩士」と説明されている。しかし、これはおかしい。「佐幕派」なら、寺田屋での謀議に参加しているはずがない。要するに「佐幕派」対「尊攘派」の対立にすれば説明し易いのだろうが、それならば、もっと堂々と歴史に残せたはずである。

尊攘路線を貫いた長州藩は数年後、幕府を打倒し、維新の「勝者」となった。しかし「勝者」ゆえ、葬り去らねばいけない史実も少なくなかった。この事件も、そんなひとつと考えた方が、合点がゆく。尊攘派が「正義」である以上、醜い内紛など、無い方がいいに決まっているのだ。

【メモ】霊山はＪＲ京都駅または阪急電鉄河原町駅などからバス東山安井下車徒歩十五分。

43 御所始御門

文久三年（一八六三）三月四日、将軍家茂は京都に入った。攘夷督促の勅書に将軍みずからが回答するためである。

将軍上洛は実に二百三十年ぶりのことだ。

この頃になると、政治の中心は江戸から京都に移っており、多くの大名も朝廷の求めに応じて上洛していた。

朝廷は幕府に、欧米列強との間に結ばれた開国の条約を破棄し、攘夷を実行するよう迫る。将軍家茂は、五月十日をもって攘夷を実行すると、孝明天皇の前で誓約させられてしまった。

こうした朝廷の背後にいたのが、長州藩だ。

この時期の長州藩は、三条実美ら尊攘派公卿と結び、幕府を窮地に陥れようとしていた。

「お墨付き」を得た長州藩は、五月十日が来ると下関砲台から関門海峡を通航する外国船を次々と砲撃する。

さらに長州藩を中心とする尊攘派は、大和行幸を画策。大和（奈良県）の神武天皇陵で天皇に攘夷祈願を行わせ、軍議を開いて一気に討幕の気運を高めようというのだ。そして八月十三日には、大和行幸の詔が出た。

しかし、こうした長州藩の暴走を、危惧する者もいた。

最も嫌がったのは、実は天皇自身である。天皇は攘夷論者だが、討幕論者ではないのだ。



「禁門の変」で激戦地になった蛤御門

それを知った薩摩藩と会津藩は、反長州の朝廷関係者と手を結び、八月十八日未明、御所内で政変を起す。「8・18の政変」である。

その結果、三条ら長州寄り公卿の参内は禁じられ、長州藩は御所警備の任を解かれて失脚した。大和行幸も中止。さらに天皇は、政変の正当性を認めた勅語を発表する。

長州藩にすれば、これまで天皇の意志である攘夷のために働いて来たのだから、功はあっても、罪など無いと考えている。そこで、弁明のための使者を京都に送るが、薩摩・会津に阻止され、なかなか上手くいかない。

そのうち、武力を背景に嘆願を遂げようとする進発派が勢いを持ち、京都になだれ込んだ。時に元治元年（一八六四）七月十九日、「禁門の変」とか「蛤御門の変」とか呼ばれる戦いである。

長州藩は御所を守る薩摩や会津の軍勢と激突し、敗走。この戦いで、来島又兵衛、久坂玄瑞、寺嶋忠三郎、真木和泉ら尊攘派指導者の多くが戦死あるいは自決して果てた。

しかも長州藩は、御所に攻め込んだことで、「朝敵」の烙印を押された。激戦地の蛤御門（京都市上京区京都御苑）は、現在は御所の西側、烏丸通りに面す。当時は少し東に、南向きで建っていた。柱や扉には多数の弾痕が見られ、生々しい。

【メモ】蛤御門は地下鉄烏丸線丸太町駅下車。

44 西本願寺と長州藩

大坂の石山本願寺は、親鸞に始まる一向宗の系譜を継ぐ。農民信徒を組織し、宗教勢力にとどまらず、強大な政治勢力として一大王国と化した。

戦国時代、織田信長は石山本願寺を攻撃。

この戦いで、中国地方の覇者毛利輝元は、石山本願寺に加勢する。兵糧数万石を七百隻の船で送り届け、三百隻の船に中国地方の門徒勢三千余人を乗せて近畿地方に上陸させた。あるいは大坂湾内一ノ瀬での海戦では、信長軍を破った。

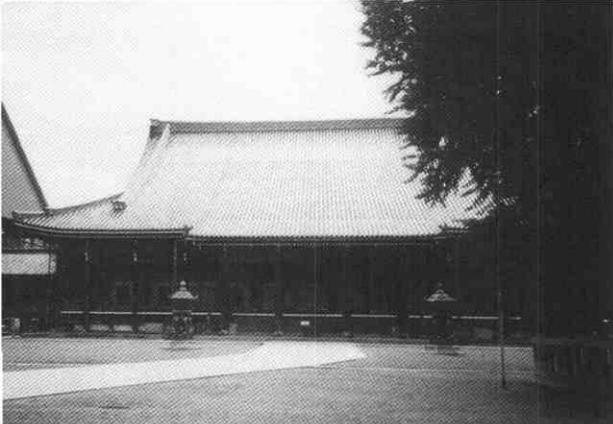
信長が石山本願寺攻略に数年も費やした一因は、毛利の加勢にあると言われる。結局、正親町天皇の仲立ちで、信長と石山本願寺は和睦した。

その後、豊臣秀吉が現在の京都市下京区堀川通七条に寺地を与え、本願寺を再興。これが浄土真宗本願寺派大本山の西本願寺となる。

やがて寺内で対立があり、分裂のすえ大谷派総本山の東本願寺が誕生。こちらは徳川家康が寺地を寄進して以来、将軍家との関係が密になった。

一方、西本願寺と長州藩主毛利家との関係は、江戸時代も続く。そして幕末になると、幕府対長州藩の争いが、寺にも影を落とすようになる。

西本願寺は別邸である翠紅館すいこうかん（京都市東山区清閑寺町）を、周防遠崎げっしよ（現在の山口県柳井市）の勤王僧月性の本拠や、長州藩尊攘派の密談場として提供した。



長州軍の敗残兵をかくまった西本願寺

特に文久三年（一八六三）六月十七日、真木和泉や桂小五郎・久坂玄瑞らが「翠紅館会議」を開き、攘夷親征を謀議したことはよく知られる。この翠紅館は維新後、民間の所有になり改築されたが、現在も東山霊山へ上る坂道の途中に、その面影をとどめている。

また、元治元年（一八六四）七月十九日、「禁門の変」で長州藩が敗れるや、河原町の藩邸にいた男女五十人の非戦闘員が、西本願寺に避難して来た。

さらに十数人の敗残兵も、転がり込む。この中には吉田松陰門下で、後に維新の元勳となる山田顕義や品川弥二郎の姿もあった。

寺は幕府の追っ手から彼らを守る決意を固める。そして山田や品川らの頭を丸め、僧に変装させて虎口を脱出させた。

その後、新選組など幕府方の詮索を受けたが、寺内からは一人の長州兵も見つからなかった。怒った新選組は柱を傷つけ、須弥壇を壊して去ったと伝えられる。

このため、幕府方の嫌がらせは執拗に続いた。慶応元年（一八六五）三月になると、なんと新選組が西本願寺に屯所を移して来たのだ。

境内で剣術稽古をし、大砲を放つ乱暴者たちに肝を冷やしながら、西本願寺は維新を迎えることになる。

【メモ】西本願寺はJR京都駅下車徒歩十分。

45 長州人首塚

長州藩は元治元年（一八六四）七月十九日の「禁門の変」で、味方の遺骸の多くを戦場に放置して敗走。しかも御所に攻め込み、「朝敵」の烙印を押されたため、戦死者の公式な供養は出来なかった。

これを見かねた越前藩は、彼らの首級を持ち帰り、現在の京都市北区鞍馬口上善寺じょうぜんじに埋葬する。後日、正面に「長州人首塚」、右側面に「元治元年甲子七月十九日於堺町御門御持場討取者也」と刻んだ墓を建立した。その後、一時荒廃していたが、明治三十八年（一九〇五）に事情を知った旧藩主の毛利家が修復し、祭祀料を出して菩提を弔った。

現存するこの首塚には、入江九一ら戦死者八名が葬られているとされる。

幕末、土佐を脱藩して長州に走った田中光頭みつあきは後年、『憂国遺言』という回顧談を残した。

これによれば、当初は上善寺の首塚に、久坂義助よしかた（玄瑞）の首級も入っていたという。松陰門下の逸材として知られた久坂は敗戦の責をとり、京都で自害して果てたのだ。享年二十五。

だが久坂の首級は、ある時一人の婦人がやって来て、掘り返して持ち去ってしまった。以来、首級の行方は分からない。

その婦人とは、久坂と京都で馴染みが深かった島原角屋しまはなかくらの芸妓お辰ではないかと田中は推測する。

久坂は「禁門の変」前日、天王山の屯営から駕籠を飛ばし、ひそかに角屋にお辰を訪ねた。ところが用心した仲居は、久坂を門口で帰してしまふ。

あとで知ったお辰は狂わんばかりに嘆き、久坂を追ったと伝えられる。この時、お辰は胎内に久坂の子

を宿していた。

京都市下京区西新屋敷揚屋町に残る角屋は、江戸初期の揚屋の形を保つ建物として、国の重要文化財に指定されている。内部は「角屋もてなしの文化美術館」として公開されていて、柱には新選組の仕業とされる刀傷などもある。

討幕・佐幕双方の若者たちが出入りし、遊び、かつ密議した廓で、昭和五十九年には、「長州藩志士久坂玄瑞の密議の角屋」の石碑も建立された。

「朝敵」の汚名を拭われ、復権した長州藩は明治になってすぐ、「禁門の変」で戦死した久坂ら二百名ほどの墓碑を、霊山（京都市東山区清閑寺町）に建立。「長州」の文字が刻まれた角材型の墓碑が、何段にも分かれて整然と並ぶ様は圧巻だ。

なお、京都市上京区烏丸通り今出川東北入ル北の相国寺墓地にも「長藩士戦亡霊塔」と刻む墓がある。

ここは「禁門の変」で得た二十数名の戦死者首級を、薩摩藩が埋めた場所だ。明治三十九年になり、これを知った毛利家が建立した。埋葬者名は湯川庄蔵と有川恒槌の二名以外は判明していない。

【メモ】上善寺は地下鉄烏丸線鞍馬口駅下車。角屋は山陰本線丹波口駅下車。相国寺は地下鉄烏丸線今出川駅下車。



越前藩が建てた長州人首塚

46 今井似幽と古聖堂

京都市役所（京都市中京区）正面前の御池通りは、昭和二十年（一九四五）四月に拡張された。その際、強制疎開として取り壊された一軒に、古聖堂と呼ばれる小さな家があった。

古写真で見ると、竹門には頼山陽筆「古聖堂」の額が掲げられ、柱には木戸孝允筆「不出門庭三五歩」「看尽江山千里重」を刻む双聯が掛かる。

門をくぐると茶室があり、室内には西郷隆盛・大久保利通・三条実美・吉田松陰・高杉晋作・坂本龍馬らの遺墨が並ぶ、「維新史跡」として知られていた。

古聖堂を建てたのは、勤王商人の今井似幽である。

もとは幕末の頃、京都高倉竹屋町にあつた今井邸内に設けられ、長州藩尊攘派の集会所として使われた。出入りした者の中には、木戸（桂小五郎）・久坂玄瑞・入江九一・寺島忠三郎・杉山松介・吉田稔麿・野村靖・山田顕義・品川弥二郎らの名が見える。まさに「梁山泊」だ。

彼らは時に古聖堂で自炊し、潜伏することもあった。最年少の山田は特に風呂焚きが苦手で、野村や品川が手伝おうとすると、桂が、

「夫が各々の修行だから決して手伝ふ事はならぬ。燃付かんで苦んで居る中に漸次上手になるんぢややハハハ、」

と言つたとの逸話が伝わる（『似幽余影』）。

今井は、長州萩に井関新兵衛の次男として生まれた。二十四、五歳の頃、京都に住む親戚今井家の跡継



古聖堂を建てた今井似幽の墓

ぎとなる。今井家は国学者今井似閑を先祖に持つ。大黒屋の屋号で、長州藩の御用商人を務めていた。

元治元年（一八六四）七月、軍勢を率いて京都に入った長州藩は、「禁門の変」を起こし敗れる。この戦いでも今井は、長州藩のために奔走。しかし今井の屋敷や古聖堂は、兵火で失われてしまう。

虎口を脱した今井は、家族と共に長州藩に亡命し、維新を迎えることになる。

そして木戸からの新政府への誘いも固辞し、京都に戻って悠々自適の生活を送った。権力には淡泊な人だったようだ。

幸い古聖堂の設計図が残っていたので、今井は河原町の長州藩屋敷付属地に再建する。多くの遺墨を収集し、室内に飾り、教育に役立てようとしたのだ。これが昭和二十年まで残っていた古聖堂なのだが、跡地は現在道路の中で、当時を偲ぶすべは無い。

今井は明治十年（一八七七）十二月五日、五十三歳で没。墓は京都市左京区黒谷町（こんかこうやうじ）の金戒光明寺（こんかいこうみょうじ）に設けられた。同寺は皮肉にも幕末、京都守護職を任じられた会津藩の本陣が置かれ、長州藩弾圧の基地になっ

た歴史がある。

【メモ】金戒光明寺は阪急電鉄四条烏丸駅や河原町駅などからバス岡崎道下車徒歩十分。京都三大墓地のひとつとされる同寺には竹田庸伯（うすけ）（幕末の長州藩医）墓や榎村正直（長州藩士。京都府知事として産業を奨励）の顕彰碑もある。

47 京都商人・福田理兵衛

元治元年（一八六四）七月十九日の「禁門の変」で長州軍本陣になったのは、臨濟宗天龍寺派の大本山天龍寺（京都市右京区嵯峨）である。

このため、兵火で伽藍の大半を失ったが、維新後、毛利家の協力を得て復興し、今日に至る。いまも法堂ほつどうには、この戦いにおける長州側「甲子殉難士各霊」三百六十二名の姓名を記した一対の位牌（高さ八十七センチ）が安置され、毎年供養が行われる。位牌は三十三回忌に、長州出身の元勲品川弥二郎らが作らせたものだ。

ただし天龍寺と長州藩の関係は、それほど古くはない。

「禁門の変」の前年、文久三年（二八六三）二月、御所警護のため上洛した長州藩が、仮本陣に使ったのが最初といわれる。

両者を仲介したのは、地元嵯峨で材木商を営む福田理兵衛だ。

福田の家は文禄元年（一五九二）から続く郷土で、幕末には京都の大火で、巨利を得た。また、推されて総年寄となり、運河の西高瀬川開削に尽力。勤王の志あつく、長州藩の若者たちと交流した。

「禁門の変」で長州軍が敗れるや、福田は妻子を京都に残して防長に亡命する。このため広大な福田邸は火をかけられ、三日間燃え続けたという。動産は没収され、競売にかけられ、五千両が地元村民に分配された。

その年八月五日、三田尻に上陸した福田は萩に赴き、伯母の嫁ぎ先を頼り、その後、山口に居を構えた。



長州藩に亡命した福田理兵衛

長州藩主は福田を厚遇し、士籍に加えて二十五俵を与えた。

さらに、京都方面で長州再挙のため活動を続けていた息子の信太郎も、長州藩を頼って来る。

信太郎は藩校明倫館に学び、また、藩命により山代郡の農兵を訓練した。

やがて維新により、長州藩は復権。明治三年（一八七〇）秋、福田は京都に上り、妻子と再会を果たした。同じ頃、福田は家督を信太郎に譲り、周防宮市高砂村（現在の山口県防府市）に屋敷を建て、隠居生活に入る。屋敷の木材、瓦はもちろん、大工職人まで京都から呼び寄せたというから、望郷の念は強かつたのだろう。

明治五年四月十三日、福田は宮市の自宅で五十九歳の生涯を閉じ、周防酒垂山に神式で埋葬された。実は凶刃を受け、十日ほど療養した末息絶えたのだ。

なぜ殺されたのか、遺族が出した福田の伝記『嵯峨の光』（昭和十年）や諸文献にも記述がないのは不思議である。

京都市右京区下嵯峨の車折神社には、福田を祭る葵忠社という祠がある。逆境に身を投じ、長州藩と運命を共にした京都商人を突き動かしたものは、一体何だったのだろうか。

【メモ】天龍寺は阪急電鉄阪急嵐山駅下車。車折神社（葵忠社）は阪急電鉄車折駅下車。

48 東福寺の防長忠魂碑

「禁門の変」に敗れ、「朝敵」の烙印を押されていた長州藩は、慶応三年（一八六七）十二月になり復権を許された。

ただちに京都に軍勢を送り込んだ長州藩は、御所警護の任に着く。その場所が「禁門の変」で死闘が繰り広げられた蛤御門であったから、感慨も一入だったことだろう。

さらに明治元年（一八六八）一月三日より、薩摩・長州の連合軍が、京都に進もうとする旧幕軍と、鳥羽・伏見で衝突した。

この戦いの最中、薩長軍は錦旗を手に入れて「官軍」となり、六日、ついに旧幕軍を撃破する。大坂城を脱出した徳川慶喜は、海路江戸に逃げ帰った。以後、一年半におよぶ維新の内戦「戊辰戦争」の始まりである。

京都市東山区本町の東福寺は臨濟宗の古刹で、京都五山のひとつに数えられる。

鎌倉時代に建立された巨大な三門（国宝）の右手には、「防長忠魂碑」がそびえる。高さ五メートル余りもある巨大な石碑だ。大正六年（一九一七）十一月、長州藩の戊辰戦争戦死者五十回忌を記念し、建立された。

発願者は東福寺塔頭のひとつ退耕庵住職。これに寺内正毅・田中義一・山県有朋・三浦梧楼など、そうたる長州閥の政治家や軍人が賛同し、名を連ねた。

碑の題字は山県書。奇兵隊を率いて鳥羽・伏見で戦った三浦が碑文を撰び、野村素軒が書いている。



東福寺の長州軍戦死者墓所

内容は戊辰戦争の概略と、長州軍の奮闘を称えたものだ。さらに裏面には、鳥羽・伏見での長州軍戦死者四十八名の氏名が記されている。

鳥羽・伏見の戦いの際、退耕庵は長州軍の陣営になった。東福寺境内の北端に位置する退耕庵は、戦国時代、毛利家の外交官として活躍した安国寺恵慧が住職を勤めるなど、長州藩との縁が深い。いまも毎年十一月には、長州軍戦死者の慰霊祭が行われている。

また、東福寺東南の丘には、鳥羽・伏見で戦死した長州軍兵士の墓数十基が整然と並ぶ（本書一一二頁参照）。

この中に、長州人として墓のある後藤深造は土佐の脱藩浪士で、もとの名を上田宗兎（そうご）という。遊撃軍の小隊長として数々の戦いに功を立て、ついには長州藩士の籍を与えられた。

しかし、そんな栄達を妬む者も多く、奮起した後藤は、伏見の戦いで真っ先に斬り込み、敵弾を受けて戦死する。二十六歳だった。

幕末の長州藩には、変革を夢見る多くの脱藩者が集まり、外国や幕府を相手に戦った。彼らは長州藩のために戦ったのではない。日本の未来を信じて戦ったのである。

【メモ】東福寺はJR奈良線東福寺駅下車、あるいはJR京都駅・阪急電鉄四条烏丸駅などからバス東福寺下車。

49 木戸孝允終焉の地

「桂小五郎」は幕末、長州藩の青年リーダーとして尊攘、討幕運動の先頭に立ち活躍した。劍豪としての武勇伝や、芸妓幾松（松子）とのロマンスなど、「陽」のイメージで語られる時期である。

桂は慶応二年（一八六六）九月、幕府の追及から逃れるため、藩命により木戸と改姓。ところが明治という新時代が訪れるや、「木戸孝允」は途端に生彩を失い、「陰」の時期に突入する。

新政府の参与、参議といった要職を歴任したものの、版籍奉還後の方針や、清国や朝鮮への使節派遣など、木戸が打ち出す政策はタイムミングが悪く、上手くいかない。明治六年（一八七三）の征韓論争では、大久保利通と組んで西郷隆盛と対立したが、途中でリタイアしてしまった。

続いて大久保が唱えた台湾出兵にも、木戸は内治優先、時期尚早を唱えて反対するが、押し切られてしまう。健康状態も悪化していた木戸は、大久保批判を日記に記しながら、いったん政府から去るしかない。明治八年二月の大阪会議で、木戸は大久保に三権分立を認めさせ、政府に復帰するが、病魔との戦いは続く。

明治十年一月、天皇の関西巡行に従った木戸だが、京都に着いた途端、またもや持病を発す。そして、近衛家屋敷を買い取った別邸で療養生活に入る。

ちょうどその頃、下野した西郷が鹿児島で不平士族に擁され、西南戦争を起こす。

これを挽回の好機と考えた木戸は、みずから兵を率い鎮圧に赴きたいと願うが、容れられなかった。もし希望が叶ったとしても、そんな体力は残っていなかっただろう。



木戸孝允終焉の地

病が重くなると、木戸は自分の遺骸は東山とうざん霊山に葬るよう願った。霊山には同志の来島又兵衛や久坂玄瑞、坂本龍馬が眠っている。最も輝いた幕末の日々が、木戸の脳裏から離れなかったのだ。

五月十八日には天皇みずから木戸の邸を慰問し、「朕ちん深くこれを憂ふ、それよく保護を加えよ」の言葉を与えた。感激した木戸は、合掌しながら、天皇を見送ったという。

ある夜、眠りから突如醒めて、

「西郷もまた大抵にせんか」

と、怒鳴ったと伝えられる。五月二十六日、四十五歳で他界し、霊山に埋葬された。

木戸終焉の邸跡は、京都市中京区土手町通り竹屋町下ル東側、石長旅館や職員会館かもがわの地で、大正五年（一九一六）には「木戸孝允旧跡」の碑が建てられた。

なお、未亡人となった松子は髪を下ろし、翠香院と号し、京都に移り住む。そして京都市中京区木屋町通り押小路下ル東側の元長州藩控え屋敷で余生を送り、明治十九年四月、四十四歳で没し、孝允の墓の隣に埋葬された。その屋敷は旅館幾松となり、いまでも残る。

【メモ】木戸終焉の地はJ R京都駅からバス荒神口下車。旅館幾松は地下鉄東西線京都市役所前駅下車

50 吉田松陰と尊攘堂

長州の吉田松陰は、京都に尊攘堂そんじやうどうを建設したいと願っていた。

松陰が考える尊攘堂とは、貴族や武士から庶民までが「天朝の御学風」を学ぶ、寮も備わった「大学校」だ。さらに堂内には祭壇を設け、国事に斃れた者たちの霊を祭ろうとも考えていた。

しかし松陰は「安政の大獄」に連座し、安政六年（一八五九）十月二十七日、江戸伝馬町てんまちょうの牢で処刑されてしまう。

その直前の十月二十日、松陰は門下生の入江くいち九一と野村和作わさく（靖）に手紙を書き、かねて相談していた尊攘堂創設の志を継いで欲しいと依頼する。

ところが、この手紙は入江のもとには届かず、入江もまた五年後の「禁門の変」で戦死してしまう。

それから二十余年が経ち、この松陰の手紙は品川弥二郎の手により、偶然、茨城県水戸から発見される。品川は長州藩の下級武士出身で、少年の頃、松下村塾で松陰の教えを受けた。維新後は政府に入り、内務大臣や枢密顧問官などを歴任し、元勳として栄達を遂げていた。

品川は松陰の手紙を読み、感慨に堪えず、亡き師の遺志を実現する決意を固める。そして、京都高倉通り錦小路の別荘（七百余坪）に修理、増築を加えて「尊攘堂」とし、一室に維新殉難者たちの神牌を祭った。

さらに品川は、祭神名簿を自分の手で書き上げ、各地に散逸していた「志士」たちの遺墨や遺品一千数百点を収集。毎年日時を定めて祭事を行い、一般にも公開した。



京大構内に残る尊攘堂

ただしこの時点では、松陰が考えた尊攘堂の祭壇部分のみが実現したに過ぎない。

明治二十三年三月、賛同者を得て尊攘堂保存委員会が設けられ、永久保存の方法が討議された。また、三十三年に品川が没するや、所蔵品と尊攘堂の新しい建物が、京都帝国大学に寄贈されることになる。

こうして三十六年四月、大学内に尊攘堂が竣工。五十三坪の洋風建築内には祭壇が設けられ、松陰と品川の木像が安置された。遺墨や遺品は貴重倉庫内に保存され、必要に応じ堂内に陳列された。

ここによりやく、大学校と祭壇をセットにした、松陰が夢見た尊攘堂が完成したと言えよう。

現在、京都市左京区吉田の京都大学付属図書館裏手には尊攘堂の古びた建物が、忘れられたように残る。品川が収集した膨大な収蔵品は、貴重な文化遺産として図書館で保存公開されている。もし、品川の尽力がなければ多くの史料が散逸し、大切な史実が忘れ去られていたに違いない。

【メモ】尊攘堂はJR京都駅または阪急電鉄四条烏丸駅などからバス百万遍下車。

51 軍都大阪の名残り

誕生間もない明治日本は、大阪を軍都とする計画を進めた。

重要施設の司令部屯所、病院、兵器工場、火薬庫等、いまとなつては、その痕跡をほとんど見ることは出来ない。

しかし陸軍墓地だけは、大阪環状線玉造駅たまつくりから徒歩十分という都会の雑踏の中に、広大な敷地を占めて残されている。

「旧真田山陸軍墓地」(大阪市天王寺区玉造本町)がそれだ。

もとは八四九七坪もあったが、現在ではその半分近くに縮小されている。墓地内には四二九九基もの墓碑が林立し、納骨堂が建つ。

大阪を建軍の中心にしようと考えたのは、長州藩出身の兵部大輔大村益次郎だ。大阪は運輸面に優れ、攻守に適した地形であり、外国の攻撃を受けやすい首都から離れている。

あるいは大村は、「西南戦争」を早くから予見していたともいう。

大村は明治二年(一八六九)十一月、不平士族の凶刃に斃れた。その志を継いだのは、同じく長州藩出身の兵部大丞山田顕義あきよしである。しかし、中央集権政策の強化などがあり、大阪軍都計画は間もなく頓挫する。

残された陸軍墓地がその機能を発揮する最初は、大村が恐れたとおり、明治十年、九州で西南戦争が起こった時だ。大阪は後方基地となり、戦地で負傷した政府軍兵士たちが続々と送られて来て、臨時病院に



大阪陸軍墓地に眠る山口県出身兵士の墓

収容された。

墓地には、大阪で亡くなった兵士の墓五百三十六基が現存している。あるいは凱旋後、流行のコレラにかかる等、大阪とその周辺で亡くなった兵士の墓も三百八十四基ある。西南戦争当時は、ある意味でのんびりしていたのか、墓にはそれぞれの出身地や親の名までが刻まれている。

それは全国にわたるが、中でも山口県出身者は多い。「山口県長門国豊浦郡延行村土族」「山口県下周防国佐波郡西ノ浦農」「山口県下長門国阿武郡萩土原平民」等々。

維新の戦火を潜り抜けた山口県の兵は、強かったであろう。故郷を遠く離れて眠る、こうした兵士たちの存在も、近代史の中で忘れてはならないと痛感させられる。

墓地を一巡すると、ある事に気づく。

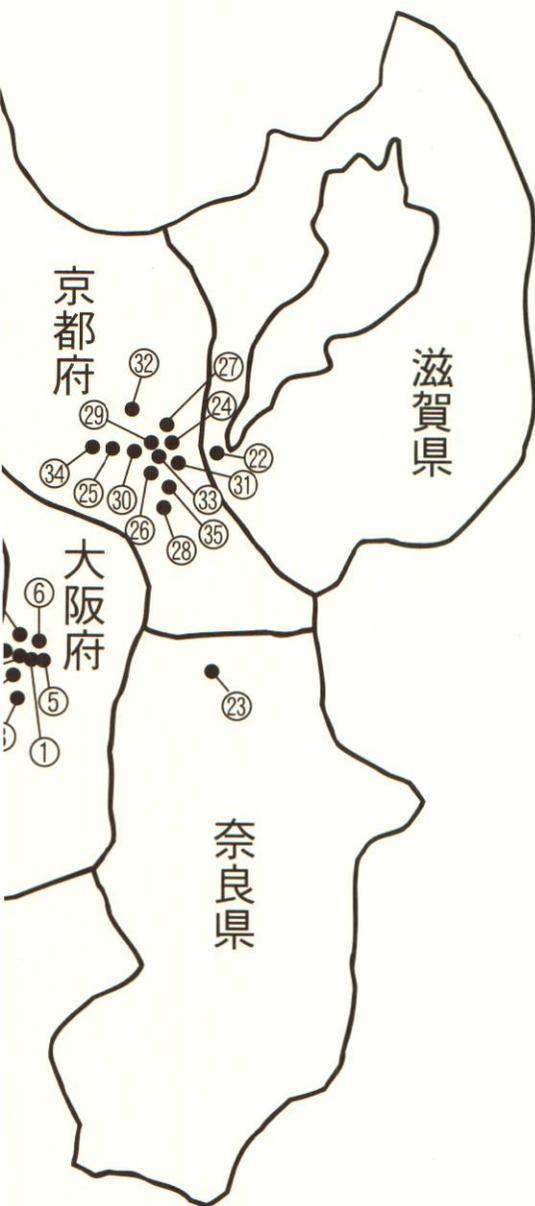
続く日清戦争では、兵士ひとりずつの墓が建てられるものの、出身地は省略される。

日露戦争になると、死者数が急増したためか、ひとりずつの墓が途中から建てられなくなり、何人かの合葬となる。

さらに、それまでとはケタ違いの戦死者を出した太平洋戦争では墓は建てられず、納骨堂へと変わる。

維新から百年近く戦争を繰り返した日本史が、この墓地には生々しく刻まれている。

そんな歴史の中で、防長出身の指導者たちが果たした中心的役割を考えた時、重たい風が墓地を吹き抜けたような気がした。



大阪府

- ①花外楼
- ②大坂蔵屋敷跡
大村益次郎下宿跡
- ③阿倍野墓地（長州兵墓）
- ④適塾
- ⑤大村益次郎終焉の地
大阪城
- ⑥造幣局
- ⑦大阪駅
- ⑧藤田美術館

兵庫県

- ⑨雲晴寺
- ⑩湊川神社
- ⑪大倉山公園（伊藤博文像台座）
- ⑫阿保親王塚
- ⑬平磯灯標
- ⑭生野銀山（山田顕義終焉の地）
- ⑮南八郎さん（山口護国神社）
- ⑯祥福寺（光村弥兵衛墓）
- ⑰残念さん（山本文之助墓）
- ⑱光念寺（鳥尾小弥太墓）
- ⑲中部幾次郎銅像
- ⑳滝川学園
- ㉑禅昌寺（伊藤博文詩碑）

滋賀県

- ㉒逢坂山トンネル東口

「関西の中の防長」関係地図

奈良県

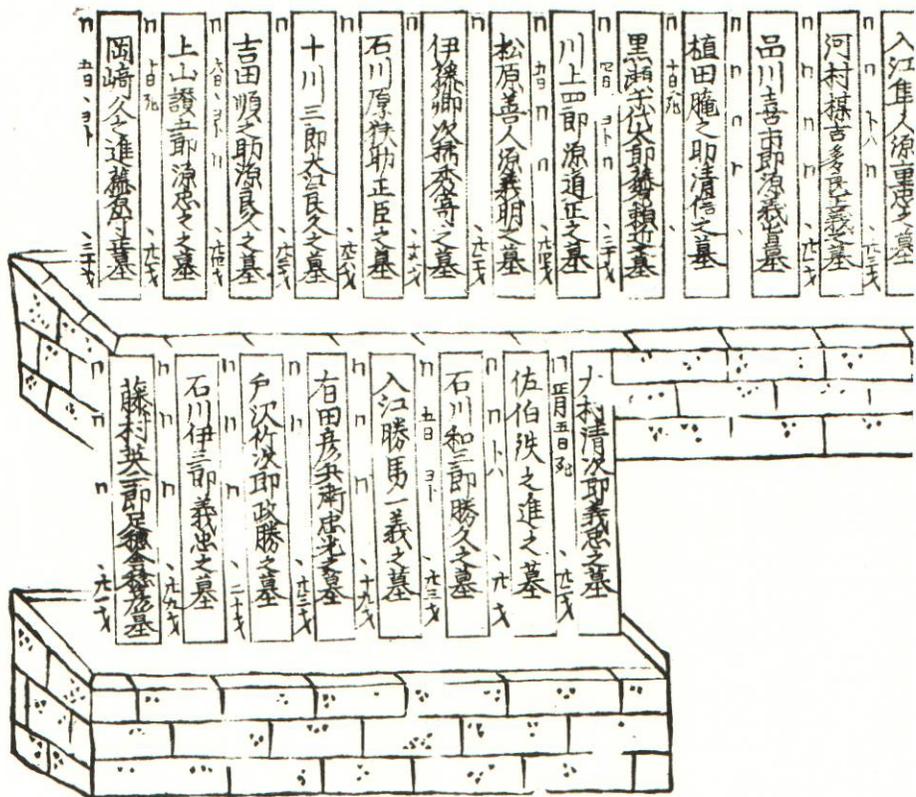
- ②③奈良国立博物館

京都府

- ②④京都国立博物館
- ②⑤壬生（新選組屯所）
- ②⑥本光寺
- ②⑦吉田松陰詩碑
- ②⑧伏見乃木神社
- ②⑨無鄰菴
- ③⑩長州藩屋敷跡
- ③⑪霊山
- ③⑫三縁寺（吉田稔麿墓）
- ③⑬西本願寺
- ③⑭天龍寺
- ③⑮東福寺



※地図上の位置はおおまかなものであり、厳密ではありませんのでご注意ください。



岩国新様小者
萬藏墓
口五日戦死 壬戌

印施

身密四辰年壬戌

あつとる西へり
なつめりらとにきき
おん人まなつらひ
まなつらひらひら
まなつらひらひら
まなつらひらひら
まなつらひらひら

長生
東国主人

【付録史料】 洛東東福寺山上戦死之墓図 (春風文庫蔵)

明治元年 (1868、慶応4年)、鳥羽・伏見の戦における長州軍戦死者の墓所は東福寺 (現在の
もあったのだらうが、明治元年当時、早くも名所と化してゆく。これは参拝者用の木版刷りの
案内『続隠玠都岐集』や、各戦死者の雄姿を描く絵草子『慶応戦死 今世英雄銘々伝』(拙著

「関西の中の防長」を片手に 山口県の歴史を歩く

最後に「関西の中の防長」と深くかわりのある防長（山口県）の史跡を紹介しよう。

萩城跡と堀内

関西方面から萩へは新幹線で新山口まで行き、バスに乗り換えて一時間余り。あるいは伊丹空港から萩石見空港まで飛び、そこからバスで日本海沿岸に沿って萩入りする方法もある。

関ヶ原合戦で敗れた毛利氏は、中国地方八力国（百二十万石）の領地を周防・長門の二力国（三十六万九千石）に減らされた。城は日本海に面した萩に築かれ、ここを江戸時代二百数十年を通じて本拠とする。長州藩の誕生だ。

明治以降、山口県庁は地の利を得た

山口市に置かれ、毛利家は瀬戸内の防府に移った。そのため萩は、近代化から取り残されたので、いまでも市内のいたるところに江戸時代の面影が残る。

萩は阿武川下流の三角州である。

指月山麓に築かれた五層からなる天守閣や萩城の主な建物は、明治七年に解体され、今は石垣や堀を残すのみ。

城跡に最も近い堀内と呼ばれる地域には、かつて毛利一門や重臣の屋敷が軒を並べていた。ここを江戸時代の古地図を見ながら散策すると、ほとんどどの区画が変化していないことが分かります。驚かされる。毛利輝元墓所、口羽家などの武家屋敷、敵の侵入に備えた鐘曲と呼ばれる迷路などが残っている。また平成十六年十一月には、萩開府四百周年を記念し、外観は武家屋敷を再現し

た萩博物館が建てられた。萩の歴史や民俗、自然を展示している。

毛利氏は芦屋市打出に塚のある阿保親王の末裔だ。一品親王だった阿保親王の末裔であることを示すため、毛利は「一品」をデザイン化した一に三ツ星を家紋としたが、土産物店や旅館にいたるまで、市内の至るところでこの家紋を見ることが出来る。



松陰が主宰した松下村塾

萩城下町と松下村塾

萩を訪れた観光客で賑わっているのは、堀内から堀を隔てた城下町だ。幕末の京都で活躍し、大阪の割烹「花外楼」にも縁が深い木戸孝允（桂小五郎）の生家はこの一角の江戸屋横丁にあり、内部は公開されている。付近には豪商の菊屋家住宅・高杉晋作生誕地・青木周弼旧宅などもある。また、最も堀内寄りのNHK中継所は、大阪を本拠に活躍した政商藤田伝三郎の生家跡で、



伊藤博文が少年期を過ごした住宅

巨大な石碑がひっそりと建つ。

木戸とともに幕末京都で奔走した久坂玄瑞の生誕地は平安古で、建物は失われているが石碑がある。逢坂山トンネルを掘る指揮を執った「鉄道の父」井上勝の旧宅は、土原に現存。井上にかんする資料室はJR萩駅に併設されていて、見学できる。

あるいは三角州南側の川島地区には、京都無鄰菴を築いた山県有朋の誕生地や、加古川に眠る鳥尾小弥太の旧宅跡がある。また、本書では触れなかったが、大阪府箕面に別荘を築いた軍人政治家桂太郎の旧宅も残る。宅前を流れる疎水藍場川のたたずまいが美しい。

さらに橋本大橋を渡り、三角州の外に出てすぐ左手の住宅街の中に、兵庫県生野でいまも「南八郎さん」として崇められる、生野拳兵の首謀者河上弥市の旧宅跡がある。

吉田松陰が主宰した松下村塾の遺構は三角州の外、椿東の松陰神社境内に残る。講義室と控室を併せてわずか十八畳半の小屋から、高杉・久坂をはじめ

め維新の原動力となった数々の人材を輩出したことは、教育の奇跡と呼ぶべきだろう。松陰の志は、京都大学内に現存する尊攘堂へと受け継がれる。

このあたりの地名は、かつて松本村だった。松陰の門下生たちの多くが、この付近に住んでいた。

松陰神社のすぐ近くの松本新道には、京都三条池田屋で新選組と戦い死んだ吉田稔麿の旧宅跡の碑があり、道を挟んで伊藤博文が少年のころ住んだ藁葺き屋根の足軽住宅がある。

伊藤は初代兵庫県知事を務め、神戸港発展に寄与するなど、とりわけ関西との縁が深い。旧宅前には伊藤の陶像が建つが、かつては同じ台座上に、神戸から運んで来た伊藤銅像があった。また、伊藤の生家跡は瀬戸内に近い山口県光市大和町東荷（JR山陽本線岩田駅よりタクシー）で、こちらには記念館や銅像がある。

明治二十五年、生野銀山視察中に没した初代司法大臣山田顕義の旧宅跡は、日本大学により顕義園として整備され、

銅像などもある。場所は毛利家菩提所東光寺の門前から徒歩数分のところ。尊攘堂を京都に設立した品川弥二郎の旧宅跡は、松本大橋のたもとだ。

大村益次郎の故郷と山口市

小郡駅が新山口市駅と改称されたのは、平成十五年のこと。ここから山陽本線で上り二駅目の四辻駅で下車する。このあたりは山口市鑄銭司。周囲はのどかな田園地帯だが、かつては日本最古の貨幣和銅開珎の鑄造所があった。

討幕戦争の軍師ともいうべき大村益次郎は、この鑄銭司の村医者の子として生まれた。生誕地には山県有朋揮毫による巨大な石碑が建つ。大村は適塾で学び、明治初期には大阪を軍都にする計画を進めるなど、特に大阪との縁が深い。亡くなったのも大阪の病院だった。遺骸は大阪から海路故郷に運ばれ、埋葬されて墓が建てられた。その場所は、四辻駅から国道2号線を徒歩二十分ほど行った長沢池のほとり。近くには大村神社や資料館が建つ。



山口市に残る藩庁門

再び新山口市駅に戻り、SLが走るこども有名な山口市線に乗り換える。山間部に二十分ほど入った山口市駅が、山口市最寄りの駅だ。駅から県庁へ至る道の左右には、県立美術館や博物館、図書館、文書館などがある。

中世、山口を統治したのは、大内氏だ。京都に憧れた大内氏は山口の区画を基盤の目のように整備し、京風文化の輸入に励んだ。それらは戦国時代、陶晴賢の反乱で焼き尽くされたが、華麗な瑠璃光寺五重塔や雪舟作庭園などに、わずかにその香りが残る。

幕末、徳川幕府の意向を無視した長州藩は、藩政の中心を萩から山口に移した。廃藩置県後も県庁は山口に置かれ、いままも近代的な庁舎を背景に、藩庁時代の重厚な門が残っている。

山口市糸米に、木戸孝允の山口邸があった。跡地には石碑が建ち、木戸神社が鎮座する。近くの普門寺観音堂では、大村益次郎が寝起きし、藩士に西洋兵学を講義していた。あるいは白石には山田顕義旧宅跡の石碑が建つ。

詩人中原中也の出身地としても知られる市内の湯田温泉には、井上馨の旧宅もあった。高田公園がその跡地で、銅像や石碑が建つ。井上は造幣寮創設に関係したり、花外楼に逸話を残したりした。

下関から小野田・宇部へ

本州最西端の下関は、馬関とか赤間関とか呼ばれ、江戸時代は北前船の寄港地として栄えた。かつては九州や大陸への玄関口で、「西の浪速」と称されるほどの商都として賑わい、あるいは

兵庫県明石出身の中部幾次郎が大津漁業の本拠を置き、遠洋漁業の基地、造船の町としても活気を呈した。いずれもいまや「昔話」である。

この、「ドル箱」下関の大半を領していたのが、支藩の長府藩（五万石）だ。長府藩の旧城下へは、下関駅から海岸線に沿ってバスで走ること約二十分。車窓から日に何度も流れが変わる関門海峡が美しい。九州との間は狭い所ですわすか数百メートルだ。

長府の忌宮神社には、集童場長室が移築保存されている。集童場は幕末、長府藩士の子弟が学んだ塾。神戸滝川学園創設者で、マツチ王としても知られた滝川弁三も少年時代、ここに通った。同門には明治の陸軍軍人として知



集童場の場長室

られる乃木希典がいる。乃木を祭る乃木神社は京都伏見のほか全国数カ所に鎮座するが、この長府にもある。

滝川弁三顕彰碑は、長府毛利の菩提所のひとつ笑山寺にある。その近くには、国宝の仏殿で知られる功山寺や、長門尊攘堂を前身とする市立長府博物館があり見逃せない。

JR長府駅へは、ここからバスで約十分とずいぶん離れている。城下に鉄道を通さなかったのは、この地域の排他性を物語る。隣が小月駅で、ここから少し山間部に入った吉田は下関市東端にあたり、江戸時代は山陽道の宿場だった。しかしここも鉄道が通ること

に反対し、近代化から取り残された。吉田は高杉晋作の墓があり、その愛人おうのが僧となり菩提を弔った東行庵がある。この地にはかつて、山県有朋（狂介）の住居「無鄰菴」があった。吉田は下関方面を守る奇兵隊の駐屯地で、山県は同隊の軍監（副将）だったのだ。山県が吉田に建てた無鄰菴は火災で失われたそうだが、その居号は京

都の別荘に移された。

山陽道の宿場が鉄道を通さなかったため、山陽本線は海岸近くに敷設される。このため石炭や工業の町として発展したのが、小野田や宇部だ。

小野田市小野田の太平洋セメント工場内には、日本初の湿式焼成窯「徳利窯」が残る。これが、神戸垂水沖の平磯灯標のセメントを製造した窯だ。JR小野田線南小野田駅下車（本数が少ない）。山陽本線小野田駅からバスもある。

あるいは、宇部市中宇部維新山の宇部護国神社には「禁門の変」後捕らえられ、大坂千日前の獄中で幕府方に殺された兵士の墓が並ぶ。みな、長州藩家老福原家の家臣だ。遺族たちが、帰らぬ夫や親や息子を思い建てた墓で「終所不知」と刻まれているのが悲しい。故郷には、大坂での惨劇が伝わっていないかったのだ。大阪阿倍野霊園の兵士たちの墓に参つてからここに来ると、さらに胸に迫るものがある。JR山陽本線宇部駅からバス小羽山入口下車。

著者紹介

一坂太郎 (いちさか たろう)

1966年、兵庫県芦屋市生まれ。大正大学文学部史学科卒業。東行記念館学芸員を務めるが同館閉館により退職。現在、萩市特別学芸員（萩博物館高杉晋作資料室長）・春風文庫主宰。著書は『松陰と晋作の志』（ベスト新書）、『幕末歴史散歩 東京篇』『長州奇兵隊』（以上、中公新書）、『萩のまちを歩く』『坂本龍馬を歩く』『高杉晋作を歩く』（以上、山と溪谷社）、『高杉晋作 100問 100答』（萩ものがたり）、『高杉晋作史料』（マツノ書店）、『高杉晋作』（文春新書）ほか。「堂々日本史」（NHK）などのテレビ出演、講演も多い。

関西の中の防長

二〇〇五年三月一日 第一刷発行

著者 一坂太郎

印刷所 有限会社 マシヤマ印刷

発行所 春風文庫

<http://www.h2.dion.ne.jp/~syunpuu>

関西の中の防長



春風文庫

- 木戸孝允の筆蹟をロゴに使う割烹が大阪北浜にある
- 長州藩は大阪で討幕・維新の軍資金を蓄えた
- 大坂適塾生六五〇人のうち最多出身地は防長二州だった
- 大村益次郎は大阪を軍都にする計画を進めた
- 造幣局の桜の通り抜けを始めた遠藤謹助はもと長州藩士である

- 初代大阪駅長は高杉晋作の義弟だった
- 兵庫県で伊藤博文は初代知事として知られている
- 高校野球で知られる神戸・滝川学園の創設者は長府藩出身
- 逢坂山に鉄道トンネルを掘削したのは萩出身の井上勝
- 奈良・京都国立博物館の設計と工事を担当したのはもと奇兵隊士